

望は耻を來らせざることを知ればなり。五是れ我等に興へ給ひしこの聖靈に於りて、神の愛我等の心に注がるが故なり。六是我等尙ほ弱かりしとき、キリストは期に備ひて、不慮なる者のために死に給ひたればなり。七是れ義「人」のために死ぬる者なりとせざればなり。八は善「人」のためには或ひは死ぬることを敢てせんとする者もあるべければなり。九是れ神は己らの愛を我等に薦め給ふ、即ちキリストは我等の尙ほ罪人なりしとき、我等のために死に給へり。九是の故に我等今その血にて義とせられたれば、尙ほ尙ほ彼によりて怒より救はるべし。一〇是れ我等もし敵たりしとき、その子の死によりて神に和がせられたらば、尙ほ尙ほ和がせられたる「後」その死にて救はるべければなり。二これのみならず尙ほ我等は我等の主イエスキリストによりて神に在りて誇るところあり、彼によりて我等は今和を得たり。三此のゆへに一人によりて罪は世に入り來り、また罪によりて死の入り來りし如く、その如くすべての者罪を犯しし故に、死はすべての人にまで及べり。三是れ世の罪に既に罪は世にありたればなり。されど捉あらずんば罪は擧げらるることなし。四されば「アダム」をモザゼに至るまで「アダム」の背と等しき罪を犯さざりし者にも死は王たりき、彼は將に來らんとする者の型なり。五されど此の種の賜物は、かの曲事の如きにあらざり、是はもしかの「人」の曲事のために多くの者死にしたらば、尙ほ尙ほ神の恩とこの「人」のイエスキリストの恩に依ける賜物とは、多くの者にまで流れたればなり。六且つこの賜物は罪を犯したる「人」によりて「來りしもの」の如きにあらず、是はかの義は「人」よりして罪に定めらるに至り、たれど、この恩の賜物は多くの曲事よりして義とせらるるに至ればなり。七是れもしかの「人」の曲事のために、死はかの「人」によりて王たりしならば、尙ほ尙ほ多くの者は、恩と義の賜物とを恩に受けつ、この「イエスキリスト」によりて生にありて王たるべければなり。八されば「人」の曲事によりて、すべての人にまで罪に定めらるること「及びし」如く、その如く「人」の完うせられたる義によりて、生を義とせらるるに至ることもすべての人にまで及べり。九是れかの一人の不順によりて、多くの者の罪人に定められたる如く、その如くこの「人」の順によりても、多くの者は義しき者と定めらるべければなり。三されど捉の咎に入り來りしは、曲事を増さんためなり。されど罪の増すところに恩は溢れたり。三是れ罪の死に王たりし如く、その如く恩も我等の主なる「イエスキリスト」によりて、永生に至るまで義によりて王たらんためなり。

第六章

是の故に我等は何を請ふべきや。我等は恩の増さんために、續きて罪に居るべきか。二有るまじきことなり。我等罪のために死にたる者は、如何にして尙ほそのうちに生きて生まんや。三或ひは我等キリストイエスに入れてバプテスマせられたる者は、みなその死に入れてバプテスマせられし者なることを汝等知らざるか。四是の故に我等その死に入れられたるバプテスマによりて、彼と共に舞に舞られたり。是れ父の榮光によりて死人のうち

よりキリストの起され給ひし如く、その如く我等も生の新あらたに歩むべきためなり。五、若し我等もし彼に連りて、その死に等しきものにならんには、尙ほ彼の庭にも（等しき者）たるべけれど、彼と同一十字架につけられしことを知る。六、かくて我等は罪の鹽の廢りて、もはや罪に對して贖あがなひざるために、我等の救き人は、キリストは死人のうちより起され給ひて、復た死に給はず、死は復び彼を主とせざることを知る。七、若し我等もキリストと向に死にしたらば、我等も彼と向に生くべきことを信ず。八、若し彼の死に給ひし死は、罪のために一とたび死に給ひしなれば、その生き給ふ生は、神のために生き給ふ故なり。九、かくの如く汝等も罪のために死にたる者なれば、神のためには我等の主なるキリストイエスに在りて生くる者なり、と己自らを勘ふべし。三、是の故にその怒に順はんがために、罪をして汝等の死ぬべき體に主たらしむる勿れ。三、また汝等の肢を不義の武器として罪に敵ぐる勿れ。されど死人のうちより生きたる者として、己自らを神に敵げよ、即ち汝等の肢を義の武器として神に敵げよ。四、若し汝等は罪を主とせざればなり、若し汝等は徒の下にあらざらず、されど恵の下にあればなり。

五、是の故に何ぞや。我等徒の下にあらざらず、されど恵の下にあらざらず、罪を犯すべきか。有るまじきことなり。六、汝等は己自らを敵ぐる者にして、神の賜に對して、神の奴隷にて、汝等は願ふところの者に對して奴隷なれば、或ひは罪の「奴隷」ならば死に至り、或ひは神の「奴隷」

第七章

ならば義に至ることを知らざるか。一、若し汝等は神に謝しまつる、若し汝等は罪の奴隷なりしが、汝等の授けられたる敵の刑に心より順ひたればなり。二、かくて汝等は罪より自由にせられ、義に對して奴隷となれり。九、われ汝等の肉の弱のゆへに、人事をかりて云ふ、汝等その肢を敵けて不浄に對し、また不法に對して奴隷となり、不法に至りし如く、その如く今聖に至らんために、義に對する奴隷として汝等の肢を敵げよ。三、若し汝等罪の奴隷なりしとき、汝等は義に對して自由なる者なりしが故なり。二、是の故に汝等今は聖とするの事にて、そのとき如何なる賞を得しや。若し此等の事の終は死なればなり。三、されど今罪より自由にせられて、神に對して奴隷となりたれば、汝等は聖に至るの賞を得にり、且つその終は永の生なり。三、若し罪の粉料は死なれども、神の賜物は我等の主なるキリストイエスにある永の生（なれ

ばなり。）」
 或ひは兄弟よ、汝等知らざるか。一、若しわれ徒を知る者に語たればなり。二、提は人の生くる限り、これを主とせよ。三、若し夫は夫の生くる限り、彼も死なば夫の生くるとき、彼も死なば提は提より自由なり、他の男に過かば提は提と呼ぶべし。されど夫も死なば、彼は提より自由なり、他の男に過くとも提は提にはあらず。四、若し若し兄弟よ、汝等もキリストの體によりて、提に對して死人となりしなり、是れ汝等は神のために賞を給ふべきために、他の者に對して

死人のうちより起され給ひし者に適かんと成り。五、我は我等内にありしとき、我はよりて「来りし」ものなる罪の情は、死のために我を結ばんとて、我等の肢のうちを縛られたればなり。されど今我等は捉へられたるものうちに死にたれば、捉より解かれたり。故に我等は憐れみのうちに在りて奴僕たるべし。

七、是の故に我等何を謂ふべきや、捉は細なるや。有るまじきことなり。されど捉によりてあらざれば、我は罪を知らざりき。そは捉もし懲する勿れと云はざれば、我は懲の「罪」たることを知らざればなり。八、されど罪は誠によりて我を捉へ、我のうちに働きて、我の熱心^{熱心}を起せり。そは捉なくんば罪は死物なればなり。九、されど我は曾て捉なくして生きたれど、我の来りしとき、罪は生き返りて我は死にたり。一〇、かくて我にとりて生のためなりし誠は、死のためなるべく見出されたなり。一、我は罪は誠によりて我を捉へ、我を救き、且つそれによりて「我を」殺したればなり。二、されば捉は聖し、且つ誠も聖、また我は罪を謝ならしめんために、善なるものによりて働きて、我がために死を「来らしめたり」、是れ誠によりて罪は返し、罪深きものとならんためなり。四、我は捉は誠なるものなれども、我等は罪の下に置られたる、肉なる者なることを我等知ればなり。五、我は我が行ふところのものは、我にこれを知らざればなり。そは我が欲するところのものは、我とこれを行はず、反つて情むところ

のもの、我これを爲せばなり。六、されど我もし欲せるところのもの、我これを爲さば、我は捉に對して「捉の」良きことを認む。七、されば今尙ほ我これを行ふにあらず、されど我に住む罪なり。八、我はわれ善は我に、即ち我が肉に住まざることを知ればなり。そは「惡を」欲することは我とともに居合せども、良きことを行ふことをわれ見出さざればなり。九、我が欲するところの善を爲さず、されど我が欲せるところの惡、これを我は行へばなり。一〇、さればもし我が欲せるところのもの、我これを爲さば、われ尙ほこれを行ふにあらず、されど我に住む罪なり。三、されば良きことを爲さんと欲する我に對して、惡の我とともに居合はずなり、との捉を我は見出だせり。三、我は我は肉なる人に頼りて神の捉を喜べばなり。三、されど我が肢のうち、我が思の捉と闘ひ、我を擧にして、我が肢にあるところの罪の捉に「服はしむる」他の捉を視る。四、我は苦しめる人、誰ぞ此の死の體より我を擧ふらんか。我は我等の主なるイエスキリストによりて神に感謝しまつる。さればわれ自ら居にては神の捉に奴僕たり、されど肉にては罪の捉に「奴僕」たるなり也。

第八章

されば今肉に頼りて歩まず、靈に頼りて歩むキリストイエスに在る者は、罪に定めらるることなし。二、我はキリストイエスに在る生^生の靈の捉は、罪と死との捉より我を自由になしたればなり。三、我は肉によりて弱かりし、捉の爲すと謂はざるところのものを「神は貸し給へばなり、即ち」神は我の字を罪の肉の體にて、且つ罪に救き

て遣はし給ひて、その肉に於て罪を罪に定め給へり。四 是れ提の義の我等靈に預ひて歩み、肉に預ひて歩まざる者のうちに成就せらるべきためなり。五 是れ肉に預ふ者は肉の事を念ひ、靈に預ふ者は靈の事を「念へば」なり。六 是れ肉の念は死なれども、靈の念は生きたるなり。七 如何となれば、肉の念は神のために滅なるが故なり。八 是れ神の提に服はざればなり。九 是れ神の靈の如何にも汝等のうちに住み給はば、汝等は肉に在らずして靈に在るなり。されどもし誰ぞキリストの靈を有たずば、此の者は彼のものにあらず。一〇 されどもしキリストの靈におはさば、憐れは罪のゆへに如何にも死人なれども、靈は義のゆへに生なり。一 されどもしイエスを死人のうちより起し給ひし者の靈、汝等のうちに住み給はば、キリストを死人のうちより起し給ひし者は、その靈の汝等のうちに住み給ふことのゆへに、汝等の死ぬべき體をも清かし給ふべし。

三 されば兄弟よ、我等は負へる者なり、肉に預ひて生くべく、肉に對してにおらず。三 是れ汝等もし肉に預ひて生きたば、汝等は將に死なんとすればなり、されどもし靈にて體の用を殺さば、生くべし。四 是れ神の靈に導かる者、此等の者はみな神の子なればなり。五 是れ汝等は復ひ憐れを抱く如く憐れたるの靈を受けしにあらざり、猶子の靈を受けたればなり、此の靈に我等は「アハ、即ち、父よ」と叫ぶなり。六 靈自ら我等の靈と同に、我等は神の見なると

とを遊す。七 さればもし見なれば世辭なり。如何にも神の世辭にしてキリストと同に世辭たるなり。我等もし「彼」と同に苦を受くるは、是れ「彼」と同に榮光をも歸せらるためなり。八 是れ我々は今の期の苦は、將に我等のために啓せられんとする榮光に較ぶるに値せずと物ふればなり。九 是れ創造せられし物の切なる望は神の子等の現を得てばなり。一〇 是れ創造せられし物の徒勞に服はしめられたるは「その」願にあらざり、されど服はしめたる者のゆへなればなり。三 是れまた創造せられし物自らも、腐朽の奴僕たることより自由にならば、神の兒等の榮光の自由に入らんとすの望を抱くなり。三 是れ我等はすべての創造せられし物は、今に至るまで同に歎き同に苦しむことを知ればなり。三 是れのみならず、尙ほ靈の初級をもてる我等自らも、猶子たること、我等の體の腹を待つ、己自らのうちに歎くなり。三 是れ我等望にて救はれたればなり。されど既に觀し望は望にあらざり、是れ誰か觀るところのもの尙ほ何ぞ望まんや。三 是れと我等もし觀せざるところのものを望まば、耐へ忍によりて待たん。二 且つ等しく靈も我等の弱を助け給ふ、是れ我等は必ず「祈らざらざるべからざる如く」に、何を祈るべきかを知らざれども、靈自ら言ひ盡し難き事を、我等のために執成し給へばなり。三 是れと「人の」心を探り給ふ者は、靈の念ふことを知り給ふ、是れ神に預ひて聖徒等のために執成し給ふが故なり。三 是れまた我等は神を愛する者、彼の「目」に預ひて召されたる者のためには、すべての物働きて善となるを知る。三 是れ即ち彼は豫め知り給ふ者を、その子の

形に似らしめんとて豫め定め給へり、これ彼を多くの兄弟等のうちにて長子たらしめ給はんだめなり。三〇。また彼は豫め定め給ひし者、此等の者を召し給へり。また召し給ひし者、此等の者を養とし給へり。また養とし給ひし者、此等の者に榮光を加へ給へり。一是の故に此等の事に對してわれ何を謂ふべきか。神もし我等のためならば、誰か我等に逆らはんや。三一。己が子を惜ますして、我等すべての者のために、これを憎し給ひし者は、豈に彼と固にすべものもを我等に賜はざらんや。三二。誰か神の選ひ給ひし者に逆らひて訟をなすらんか。神、義とし給ふ者。三三。罪に定むる者は誰ぞや。キリスト、死に給ひし者、されど反つて起き給へる者。彼は神の右手にをり給ふ、彼はまた我等のために執成し給ふ。三四。誰か我等をキリストの愛より離すべきか。觀、或ひは困、或ひは迫害、或ひは倒、或ひは擧、或ひは危、或ひは劍か。三六。練して、汝のために我等は丹ねもす殺され、我等は屠の羊の如く扱へられたり、とあるか如し。三七。されど此等のすべてのものうちにて、我等を愛し給ふ者によりて勝お持て餘あり。三八。或ひは死も、或ひは生も、或ひは天使も、或ひは長も、或ひは力も、或ひは現に有る物も、或ひは胎に有らんとする物も、三九。或ひは高きも、或ひは深きも、或ひは他の如くなる創造せられし物も、神の愛、即ち我等の主なるキリストイエスに在る(愛)とて、我等を離らすこと能はざるべきことを、我は確く信ずればなり。

第九章

ん、感るにあらず、二即ち我に大なる哀と心に絶えざる痛とあり、三それは我が兄弟また肉に荷ふ慈者のためには、キリストよりアナテラんことをも、我は自ら願ひたればなり。四。彼等はイエスマンに於て、猶子たること、また榮光、また契約、また燒の授與、また服侍、また約束のものなり。五。先祖等は彼等の「先祖等なり、また肉に荷ふキリストは彼等のうちの「なり」。彼はすべての物の上におはし、永に脱せられませし神なり。アメン。六。されど神の言は澄々たりとはあらず、それはイエスマンにつけるすべての者、此等の者はイエスマンにあざればなり。七。また彼等はアブラハムの種なるが故に、すべての者「その」思なるにあらず、されどイサクに於て汝の種と稱へらるべしとあり。八。是れ肉の兄弟、此等の者は神の愛にあらず、されど約束の兄弟は種と稱へらるなり。九。是は此の約束の言は、此の期に猶ひてわれ來るべし、かくてイサに「子あらん、とあればなり。一〇。それのみならず、尙ほりへかも我等の先祖なるイサク「人」より孕を得たるとき、二。未だ生まれず、また何の義をも、或ひは悪をも行はざるに、神の言は選に猶ふこと、行にてにあらず、されど召し給ふ者よりなることを存し給はんために、三。彼に謂ひ給へり、大なるはかきなるに戀へんと、三。練して、キロンを我は愛せり、されどエロクをば我は憎めり、とあるが如し。

一。是の故にわれ何を謂ふべきや、不義は神に添ふにあらざるか。有るまじきことなり。二五。そ彼はモラセに、我は誰にても眩まんとする者に堅をなし、また我は慈恵と思ふ者に慈恵を

施すべし、と云ひ給へばなり。一六 されば欲する者によるにあらず、また走る者によるにあらず、唯惑をなし給ふ神にのみよるなり。一七 是は聖書はバロに對して、我は同じ此の事のため、即ち我が力を衰はし、また地のすべてに於て我が名を宣ふがために、汝を起したり、と云へばなり。一八 されば彼は欲する者に惑をなし給ふ、また彼は欲する者を頭にしがふなり。一九 されば汝等はわれに謂ふならん、何故に彼は何れを欲せ給ふや、誰かその首に逆らふや。二〇 あるいは、豈に然らんや、神に言ひ逆らふ汝は誰なるや。作られたる物は作りし者に對して、何故に汝は我をかく爲しや、と謂ふべきや。二一 或ひは陶工は同じ土の塊をもて、一を賣きに用ふる器となし、また一を賤きに用ふる〔器〕となすの權なきか。二三 されば神もし怒を衰はし、また力を知らしめんと欲して、滅に備はれる怒の器を、忍をもて埋へ給ひ、二三 また榮光のために豫め備へ給ひしところの器の器に、榮光を擧げしめ給はんと欲したりしも、何あらんや、二三 汝等〔器〕をかくて彼は召し給へり、エズキ人のうちより我等を召し給ひしのみならず、尙ほ國人のうちよりも召し給へり。二三 本ゼヤのうちにも、我は我が民にあらざるもの、我が民と呼び、また覆せざりし者を覆せり、と彼は云ひ給ふてあるが如し。二三 またかくあらん〔即ち〕汝等は我が民にあらず、と彼等に謂ひ給ひし處、そこに彼等は生ける神の子と稱へらるべし。二四 されどイサヤはオスラエルに就きて、假令オスラエルの子の數は海の沙の如くなりとも、殘れる者ぞ救はるべきなり。二五 是は彼は義をもて言を終り、

且つ約束給ひたればなり、即ち約束たる言を主は地の上に爲し給ふべし、と明かなり。二五 我等はなりしなるべく、またゴモラに等しくせられたるなるべし。二六 是の故に我等は何を謂ふべきや。即ち義を迫り求めざりし國人は我を得たり、されどその義を得しは信仰にてなり。二七 然るにオスラエルは義の掟を迫り求めつつ、義の掟にまで達せざりき。二八 何故ぞや、我等は信仰にてせず、されど掟の行にて〔得らる〕如くしたるが故なり。是は彼等は硬の石に衝き當りたればなり。二九 見よ、我は硬の石、また硬の岩を多くに衝く、すてて彼を憐する者は辱しめらるることなるべし、と録されたるが如し。

第十章

兄弟よ、我が心の悦び、オスラエルのために神に對ひての新顔とは、彼等の救いに入るにあり。三〇 是はわれ彼等のために、神の熱心を彼等の有することを隠すれども、知識に備はざればなり。三一 是は彼等は神の義を知らざれば、巴の義を立てんことを求めて、神の義に服はざりければなり。三二 是はキリストは信するすべての者に對する義のために掟の終はればなり。三三 是はモサゼは掟につきての義を、これを行ふ人はそのうちに生くべし、と録せばなり。三四 されど信仰の義はかく云ふなり、汝はその心のうちに、誰か天に昇るべきか、是れキリストを作ひ下らんためなり、と云ひ、七 或ひは誰ぞ空路にまで下り往くべきか、是れキリストを死人のうちより作り上らんためなり、と云ふ勿れ。三五 されど何と云はん

か、謂は汝に近く、汝の口に、また汝の心に在り。是れ我等が益する信仰の嗣なり。主即ち汝もし汝の口に主イエスを告白し、またその心にて神は彼を死人のうちより起し給ひしことを信するならば、救はるべし。一〇 是は心をもて信じて義に至り、また口をもて告白して義に至ればなり。一 是は聖書は、すべて彼を信する者は辱しめられじ、と云へばなり。二 是はエムヤ人とギリシヤ人との區別あらざればなり、是はすべての者の同じ主は彼を呼び頼むところのすべての者に對ひて宿み給へばなり。三 是はすべて誰にても、主の名を呼び頼む者は救はるべければなり。一四 是の故に彼等が信ぜざる者を如何にして呼び頼むべきや。また彼等が聞かざりし者を如何にして信すべきや。また信ざる者なくば、彼等は如何にして聞くべきや。一五 また彼等もし使はされずば、如何にして信すべきや。録して、福音は平和を宣傳ふる者、福音の喜き事を宣傳ふる者の足は、如何に美はしきものであるが如し。一六 されどすべての者福音に頼むしにあらす。是はイサヤは、主よ誰か我等の聞かすことを信せしやと云へばなり。一七 されば信仰は聞かすことよりし、聞かすことは神の詞によりてす。一八 さればわれ云はん、彼等は聞かざりしか。豈に然らんや、彼等の聲は地のすべての處にまで出で來れり、またその嗣は世界の極にまで到れり。一九 されどわれ云はん、イエスマルは知らざりしか。先づモラセ云ふ、われ國人にあらざる者をもて汝等を如まじめ、楯なき國人をもて汝等を怒らしめん。二〇 またイサヤも解らずして云ふ、我は我を榮めざる者に見出されたり、我は我を問は

ざる者に對にわれり。二 また彼はイエスマルに對して云ふ、我は目にもす、願はずして言ひ廻らば民に對ひて、我が手を伸べたり。是の故にわれ云はん、神はその民を押し退け給ひしにあらざるか。有るまじきことなり。是は我もアラハムの種類、ベニヤミンの族のイエスマルなればなり。三 神は豫め知り給ふその民を押し退け給はざりき。或ひは汝等はエリヤに就きて聖書の云ふことを知らざるか。彼は如何にイエスマルに對らひて神に訴ふるや、云ひけるは、主よ、彼等は汝の豫言者等を殺し、且つ汝の祭壇を崩り崩せり。かくて唯我のみ遺されたりし、彼等は我が魂をも榮むるなり。四 然るに神の爵は何と彼に云ひ給ふや、我は己自らのために、バアルに跪かざる者七千人を描けり。五 是の故にその如く今の期に於ても、恵の選に當ひて殘れる者はあるなり。六 されどもし恵にてならば、もはや行にてはあらず、然らずんば恵はもはや恵とはならず。されどもし行にてならばもはや恵にあらす、然らずんば行はもはや行たらず。七 是の故に何ぞや。イエスマルは察めしところを得ざりき、されど選ばれたる者はこれを得て、その餘の者は鈍くせられたり。八 録して、神は彼等に眠の豫を興へ給へり、されば今日の目に至るまで、目は醒ることなく、耳は聞くことなし、とあるが如し。九 またイサヤ云ふ、彼の食卓は割となれ、また落となれ、また頭となれ、また脚となれ。一〇 その目は暗みて觀る

ことなからしめ、その脊を常に用ましめよ。一 是の故にわれ云はん、彼等は倒るために頭かざりしか。有るまじきことなり。それと彼等の曲筆、もし世の富となり、また彼等の過、國人の富となり人に及びり。二 されば彼等の曲筆、もし世の富となり、また彼等の過、國人の富となり、故に國に及びり。三 さればわれ國人なる汝等に云はん、我は國人の使徒なるが故に、我が此の衆事を預んするなり。四 我は如何にもして我が肉を知ましめ、彼等のうち或る者を救はん。五 是は彼等の棄てらるること、もし世の和とならば、その受け入れらるることは、死人のうちよりの生にあらすして何ぞや。六 されば初稗もし聖からほ塊も理くまた根もし聖くば枝々も「聖し」。七 されど假令その枝々の或るもの伐り拂はれたれど、野生エライオンなる汝等はそのうちに接がれ、その根とそのエライオンの大どに間に與かる者となりたりとも、八 枝々に對して語る勿れ、汝もし誇るとも汝は根を毀せず、されど根は汝を安ふるなり。九 是の故に汝は、枝々の伐り拂はれたるは、我のこれに接がるためなり、と謂ふべし。三 良きかな、彼等は不信仰にて伐り拂はれたれど、汝は信仰にて立つなり。機心する勿れ、されど懼れよ。三 是は神もし自然のままなる枝々をさへ惜み給はざりしならば、恐らくは汝をも惜み給はざるべければなり。三 是の故に神の慈愛と憐格とを見よ、廢格は彼等の上に落ち、慈愛は汝の上にあり。汝もしその慈愛に居らば「良し」然らずんば汝も伐り拂はるべし。三 されば彼等もし不信仰に居らずば、彼等も接がるべし、是は神は復ひ彼等を接ぐことを能くし給ふべければなり。二 汝もし自然のままなる野生エライオンより伐り拂はれて、自然に反して良きエライオンに接がれしならば、況して自然のままなる此等の者は、己がエライオンに接がれざらんや。三 是は兄弟よ、われ汝等の己自らを惜まざるなりとすることなからんために、此の奧義を汝等の知らざるを欲せざればなり、即ち總分のエライオンの鈍くなりたるは、國人の愚の入り来る「期」までなり。六 かくてすべてのエライオナルは數はるべし、錄して、授け者シオンより來り給ふべし、かくてエライオンより不慮を取り除き給はん。またわれ彼等の罪を取り去りたりらんとときに、我より彼等のために「立つる」契約は是れなり、とあるが如し。八 福音に循へば、如何にも（彼等は）汝等のゆへに汝（なり）されど速に循へば、先祖等のゆへに愛せらるる者なり。九 是は神の賜物とその召とは悔ひ給ふことななければなり。三 是は汝等は會て神に願はざりしかど、今彼等の願はざるために毀まれたる如く、三 其の如く此等の者も、汝等の恩を「受くる」ために今願はざりしなり、是れ彼等も恩を得んためなり。三 是は神はすべての者を慰み給はんために、すべての者を不順のうちで領お込め給ひたればなり。三 是は神の富と智慧と知識との深きよ。その教は測り難く、その道は尋ね難し。三 誰か主の恩を知りし、或ひは誰かその隠り人となりしや。三 或ひは誰か先づ彼に與へて、彼に酬いらるべきや。六 是はすべての物は彼につきて、また彼によりて、また彼のためなればなり。七 發光世々に至るまで彼に「われ」。アメン。

第十二章

是の故に兄弟よ神のもろもの羸弱によりてわれ汝等に勸む、神に憑せらるる生ける聖き賦け物なる汝等の體を、^註道に合へる汝等の服を、^註神に

に獻げよ。ニまた此の世に彼勿れ、されど神の榮にして著し給ふ迄き如何と懸望するために、汝等の思を化へて新にせよ。ミそは我に與へられたるこの世によりて、汝等のうちに在るすべての者に云へばなり、必ず念はざるべからざることを越えて高く念ふ勿れ、されど神がおのにおに類ち給ひし信仰の羸に備ひ、正しき心に合ひて念ふべし。ヨそは我等は一つの體に多くの肢あれども、その肢みな同じ用を有たざる如く、^五その如く我等多くの者は、キリストに在りて一體にして、一人一人互に肢なればなり。^六されば我等に與へられたる羸に備ひて、異なる賜物を有つが故に、或ひは豫言を^七有つ者は^七信仰の割合に備ひて^七豫言し、^七或ひは奉事を^八有つ者は^八奉事に^八従ひ、^八或ひは勸を^九有つ者は^九勸に^九あたり、^九願け與ふる者は^九賦けをもて^九、^九先頭に立つ者は^九勸をもて^九、^{一〇}し^{一〇}をなす者は^{一〇}快き心をもて^{一〇}せよ。九聲は^{一〇}徳ることなく、^{一〇}惡を忌みて聲に^{一〇}精き、^{一〇}兄弟の體をもて互に親しむ、^{一〇}敬をもて互に導き進め、^{一〇}勸勉に在りて厭ふことなく、^{一〇}羸に於て^{一〇}熱く、^{一〇}期に對して^{一〇}謙へ、^{一〇}三望に在りて^{一〇}喜び、^{一〇}羸に耐へ、^{一〇}羸に^{一〇}憐念なく、^{一〇}三望徒等の必要に^{一〇}親しく交はり、^{一〇}旅人を^{一〇}懇にすることを追ひ求め、^{一〇}汝等を^{一〇}迫害する者を^{一〇}祝願せよ、^{一〇}祝願して^{一〇}願ふべからず。^{一〇}喜ぶ者と共に^{一〇}喜び、また泣く者と共に^{一〇}泣け。^{一〇}互に同じき事を^{一〇}念ひ、^{一〇}商

第十三章

まものを念はず、されど卑きものに伴へよ。汝等己自らに就きて^一忤き者となる勿れ。七誰に對しても^二惡をもて^二惡に返す勿れ、すべての人の^二面前に^二良き^二辨を^二先づ^二思へ。一八もし^三能ふべくんば、^三汝等己自らに^三きて^三の^三こと^三は、^三すべての^三人と^三共に^三平和^三に^三せよ。一八愛せらるる者よ、^四汝等己自らに^四を^四復す^四勿れ、されど^四怒に^四場所を^四與へよ、^四そは^四主^四云ひ^四給ふ、^四羸を^四復す^四は^四我に^四委せよ、^四われ^四憐れむべければなり、と^五録されたればなり。三〇是の故に^五汝の^五敵も^五し^五飢ゑ^五な^五は^五これ^五に^五嘔^五は^五し^五め^五よ、もし^六湯か^六ば^六これ^六に^六飲^六ま^六し^六め^六よ、^六そは^六かく^六爲す^六ときは、^六炭火^六を^六俵^六の^六頭^六に^六積む^六べければなり。二惡に^七勝たるる^七勿れ、されど^七善をもて^七惡に^七勝て。

すべての^一魂^一をして^一上に^一在る^一權^一に^一服^一は^一し^一め^一よ、^一そは^一神^一より^一にあ^一ら^一ざ^一れば^一振^一ある^一こと^一なく、^二在る^二ところ^二の^二權^二は^二神^二より^二立^二て^二ら^二れ^二た^二れば^二なり。三されば^三權^三に^三抵抗^三する^三者は^三神^三の^三定^三に^三逆^三ら^三ふ^三なり。また^四逆^四ら^四ふ^四者は^四己^四自^四ら^四の^四ため^四に^四裁^四を受^四く^四べし。三そは^五長^五等は^五善^五き^五行^五の^五羸^五にあ^五らず、^五されど^五惡^五し^五き^五行^五の^五權^五なり。汝は^六權^六を^六抱^六れ^六ざ^六ら^六ん^六ことを^六欲^六する^六か、^六善^六を^六爲せ、^六されば^六それ^六より^六誦^六を得^六べし。四そは^七善^七き^七事^七のため^七に^七汝^七に^七對^七する^七神^七の^七事^七へ^七人^七な^七れば^七なり。されど^八汝^八もし^八惡^八を^八爲^八す^八ば^八權^八を^八得^八べし。そは^九從^九に^九劍^九を^九帶^九び^九ざ^九れば^九なり。そは^九神^九の^九事^九へ^九人^九にて、^九惡^九を行^九ふ^九者^九に^九怒^九をも^九て^九報^九ゆる^九者^九な^九れば^九なり。五かゝ^{一〇}る^{一〇}が^{一〇}故^{一〇}に^{一〇}服^{一〇}は^{一〇}ざる^{一〇}を得^{一〇}ず、^{一〇}唯^{一〇}怒^{一〇}の^{一〇}ゆ^{一〇}へ^{一〇}に^{一〇}のみ^{一〇}ならず、^{一〇}尙^{一〇}は^{一〇}良^{一〇}心^{一〇}の^{一〇}ゆ^{一〇}へ^{一〇}にも。六此^{一一}の^{一一}ゆ^{一一}へ^{一一}に^{一一}汝^{一一}等^{一一}も^{一一}賢^{一一}を^{一一}納^{一一}め^{一一}よ、^{一一}そは^{一一}彼^{一一}等^{一一}は^{一一}同じ^{一一}く^{一一}此^{一一}の^{一一}事^{一一}のため^{一一}にも、^{一一}餘^{一一}念^{一一}を^{一一}ら^{一一}ざる^{一一}神^{一一}の^{一一}仕^{一一}う^{一一}人^{一一}な^{一一}れば^{一一}なり。七是^{一二}の^{一二}故^{一二}に^{一二}すべての^{一二}者^{一二}に^{一二}對^{一二}して^{一二}その^{一二}義務^{一二}を^{一二}致^{一二}せ、^{一二}即ち^{一二}賢

を「愛くべき者には眞を、關懷を「愛くべき者には關懷を、懼るべき者に徳權を、歡ぶべき者には敬を致せ」。八汝等は互に愛を負ふの外、何を人も人に負ふ勿れ。そは他を愛する者は彼を成敗すればなり。九そは是れ、察する勿れ、教す勿れ、迷する勿れ、僞證する勿れ、發す勿れ、その他如何なる誠ありとも、汝の隣人を己自らの如くに愛すべし、と云へる此の言のうち、纏へ掛られたればなり。一〇愛は隣人に對して惡を行はず、是の故に愛は捉の漸なり。一 また期を知るが故にかく「屬すべし」、即ち既に我等は眠より起りてくべき時なり。そは我等の僞せしときより、今救は更に近ければなり。二夜は更けて日近づけり。是の故に我等の暗の行を棄てて、光の武器を棄てし。三我等皆目のうちに「歩む」如く、宜しきに適ひて歩むべし。宴樂また醉酒に「歩む」勿れ、房事また好色に「歩む」勿れ、辯ました斯に歩む勿れ。四されど主イエスキリストを濟し、かくて肉の慾のために懼を爲す勿れ。

信仰に於て弱き者を助けよ、その勸誘を棄く勿れ。三或る者はすべての物を喰ふべしと信す、されど弱き者は野菜を食す。三食する者は食せざる者を救く勿れ、そは神これを受け給へばなり。四汝は誰なれば他の家僕を救くや、彼は己が主のため

第十四章

に立ち、或ひは倒るなり。されば彼は立たしめらるべし、そは神これを立たしむることを能くし給へばなり。五或る者は「この」目を「かの」目に勝れりと斷じ、或る者はすべての目を「等し」と斷す。おのおのその思にて確く定むべし。六日を重んずる者は主のために感んじ、

また日を重んぜざる者も主のために重んずす。また食する者は主のために食す、そは神に感謝すればなり、また食せざる者も主のために食せず、即ち神に感謝すればなり。七そは我等のうち誰も己自らのために生き、また死ぬる者なればなり。八そは我等は假令生くとも主のために生き、假令死ぬるとも主のために死ぬればなり。是の故に假令我等の生くるも、また假令死ぬるも、我等は主のものなり。九そはこれがためにキリストは死に給ひたれど、起きて生き給へばなり。是れ死ぬる者をも、生ける者をも主と見給はんためなり。一〇然るに汝は何故に汝の兄弟を救くや、或ひは汝も汝の兄弟を養するは何ぞや。そは我等はみなキリストの救き座に對ひて立つべければなり。一 一そは主云ひ給ふ、我は生く、すべての隣は我に對ひて屈まり、すべての舌は神に對ひて告白すべし、と饒まれたればなり。二 されば我等おのおの己自らの就きての言を神に申すべし。三 是の故に我等も互に救くべからず、反つて汝等かく斷すべし、兄弟に對して礙或ひは難を置かじと。四 我は主イエスに在りて知り、また確く信す、即ち獲れたるものなるべく勸誘する者、彼には饒れたるものなりと「云ふ」の外、何物もそれ自らゆへに、獲れたるものにあらざることを。五 されどもし「汝」を憐れによりて汝の兄弟を哀しましめなば、もはや汝は憐に預ひて歩むにあらざり。汝の愈癒をもて彼を止むす勿れ、彼のためにキリストは死に給ひたり。六 是の故に汝の救き事を聞かざる勿れ。七 そは神の國は喰ふこと、また飲むことにあらず、されど聖靈にある義と平和と喜となればなり。八 人は

かくしてキリストに縁^縁はる者は、神に落ちる者にて、また人に是とせらるる者なればなり。二九されば我等平和の事と、互に徳を建つこととを追ひ求むべし。三〇食慾のために神の徳を毀つ勿れ。すべての物淨し、されど頭によりて食する人には惡なり。三内を味はぬことも、また葡萄酒を飲まぬことも、また次の兄弟を隣はしめ、或ひは躰からしめぬことも良し。三汝、信仰あるか、己自らに備ひてこれを神の面前にて保て。是とすとるをもて己自らを救かざる者は、福なる者なり。三されど疑ふ者もし嘘はば罪に定めらる、そは信仰をもてせざればなり。さればすべて信仰にてせざるは罪なり。

我等強きは強からぬ者の弱を負ふて、己自らを救はすことなるべきなり。二我等おのぢの徳を建てんがために、善をもて隣人に尊ばるべし。三

はキリストと己自らを救はせ給はざりき。されど汝を誘ふ者の誘は、我が上に落ちたり、と縁されたるが如し。四そはすべて強め縁されたる事は、我等の教のために縁されたればなり。是れ聖靈の怒と慰とによりて、望を我等の有たんだめなり。五忍と憐との神は、我等をして互にキリストイエスに備ひて、同じき事を念はしめ給ふ。六是れ心を一にし、口を一にして、神即ち我等の主イエスキリストの父に、榮光を我等の歸しまつらんためなり。七かかるが故に神の榮光のために、キリストの我等を受け給ふ如く、汝等も互に受けよ。八されどわれ云はん、イエスキリストは神の眞理のために、割禮の勢へ人となり給へり。是れ先祖等の約束を堅うし給

第十五章

はんため、七また慰のために、神を國人の頭めまつらんためなり。縁して此のゆへにわれ國人のうちにて汝に對ひて告出し、また汝の名のために讃め歌ひまつらん、とあるが如し。一〇復た云ふ、汝等國人よ、彼の民と共に喜べ。二復び云ふ、すべての國人よ、主を讚美しまつれ、すべての民よ、彼を稱へまつれ、三また復びイサヤ云ふ、エツサヤの根あらん、かくて興る者は國人の長たらん、國人は彼に望をおくならん。三されど望の神は聖靈の力をもて、望にある汝等を興ならしめ給はんために、信仰に於けるすべての喜と平和とをもて、汝等を満たし給ふべし。

四されば我が兄弟よ、我も自ら汝等に就きて、汝等自らも善の處てる者、すべての知識の處てる者、また互に縁し得る者なることを確く信ず。一五されど兄弟よ、神より我に與へ給ひし處によりて、汝等を憐ひ出づるまゝに、部分ながら、懼らず汝等に善き贈れり。六是れ國人の供へ物の、聖靈にて聖められ、蒸餾せらるる物とならんために、神の福音を祭りつ、國人のために、我をイエスキリストの仕う人たらしめんとせり。七是の故に我は神に對する事につきては、キリストイエスに在りて勝るところあり。八そは我は國人を願はしめんとして、實にても行にても、微と跡の力をもて、神の靈の力をもて、キリストの我によりて行ひ給はざりし事は、少しも踏だることを敢てせず。一九かくてエリサレムより(始まり)遊りてイェリコに至るまで、キリストの福音を滿たしたる程なればなり。三〇故に我は他人

の「置きし」處の上に家を建てざるために、キリストの叫べられざる處に、福音を宣傳することを與とする者なり。三 されど練して、彼に就きて宣傳せられざりし者は、目のあたり見ると、また剛かざりし者は倍々とし、とあるが如し。三 かかるが故にわれ汝等の許に到らんとせしを、屢々勉げられたり。三 されど今此の地にはもはや「福音を宣傳せよ」とき處なく、且つ多年の間、汝等の許に到りんとを待ち望みたまはば、**四** いかばスバニヤに往かんとき、汝等の許に到らん。それは往きかりに汝等を見て、先づ幾分にもわれ汝等に滿たされば、また汝等より彼方に送られんことを望めばなり。二五 されど今われは聖徒等に到らんために、エカセラに往く。三 是は「エカセラ」に在る聖徒等の貧しき者のために、多少なりとも、親しき交を爲すことを悦びたればなり。二七 是は彼等は憐れせられ、且つ貧乏と云ふところあればあり。是は國人もして彼等の貧なるものに親しく交はりしならば、彼等は肉なる物をもて彼等に仕うべき筈なればなり。二八 是の故に此の事を遂げ、且つ此の實を彼等に對して確めしとき、汝等によりてスバニヤに往かん。二九 またわれの汝等の許に來むんときは、キリストの福音の滿ちたる筈をもて到らんことを知る。三〇 されば兄弟よ、我等の至りエスキリストによりて、また靈の愛によりて、我と共に働みて我がために、神に祈らんことを汝等に勸む。三一 是れエカセラに在る願はざる人々より、われの援はれんため、また我が奉事のエカセラに在る聖徒等に蓋納せらるものとなりたためなり。三二 是れ神の意によりて當もて汝

等の許に來らんため、且つ我の汝等と共に働にせられんためなり。三 されば平和の神、汝等すべての者のうちにあれ。アメン。

第十六章

またわれエカセラに在る福音の事へ人なる、我等の姉妹アイベを汝等に薦む。二 聖徒等に値する者として、彼を受け、また彼の要する汝等の物をもて彼を採けよ。それは彼も多くの人の救助者となり、且つわれ自らの救助者なればなり。三 キリストイエスにある我が同業者なる、アリスキラとアキラとに挨拶せよ。四 彼等は我が魂のために、己自らの首を差し出したしたる者なり。唯我の彼等に感謝するのみならず、尙ほ國人のすべての福音も「感謝するなり」。五 またその家に在る樂喜に挨拶せよ。我が愛せむるエバイネトに挨拶せよ、彼はアカナのキリストの初穂なり。六 我等のために多くの苦勞をせしアリスキラに挨拶せよ。七 我が救者にして我が同じ囚人なる、アングロニコとエニナスとに挨拶せよ。彼等は使徒等のうちに記せられたる者にて、我よりも前にキリストに在りし者なり。八 主に在りて我が愛せらるるアソリアに挨拶せよ。九 キリストに在る我等の同業者なるウルバノと、我が愛せらるるスタキスとに挨拶せよ。一〇 キリストに在りて是をせられたるアペレに挨拶せよ。アリストプロの家の人々に挨拶せよ。一 我が救者なるヘロデオナに挨拶せよ。ナルキンの家の主に在る人々に挨拶せよ。二 注にありて苦勞するトリバナとトリボサとに挨拶せよ。主にありて多くの苦勞せし、愛せらるるルシスに挨拶せよ。三 主にありて選ばれたる者なる

ルボヌと、その母即ち我が母とに挨拶せよ。四 アヌニキリト、フレボン、ヘルヌ、バト
 ロバ、ヘルヌ、また彼等に伴ふすべての兄弟等に挨拶せよ。五 ビロゴとユリヤ、ネレノ
 とその姉妹、またオルンバヌ、また彼等に伴ふすべての聖徒等に挨拶せよ。六 聖き挨拶をも
 て互に挨拶せよ。キリストの諸集會汝等に挨拶す。

七 せまた兄弟よ、われ汝等に勸む、汝等の罪びし故に逆らひて辭ひ分れ、また驕を起す人々
 を認みて、彼等より避けよ。八 是はかくの如き者は我等の主イエスキリストの奴僕にあらざ
 らざれば己自らの腹の「奴僕」にして、親切なる言と諛め言とによりて、賢料なる者の心を欺け
 ばなり。九 是は汝等の願ふことはすべての人に到りたればなり、是の故に我は汝等に勧きて
 喜ぶなり。されどわれ汝等の善のために留くして、惡のためには泣き者たりんことを欲す。三〇
 されば平和の神は速にサタナを汝等の足の下に踏み碎かし給ふべし。我等の主イエスキリス
 トの恵、汝等のうちにあれ。二 我が同業者なるテモテと、我が練者たるルキオと、ヤソソ
 と、ツシパテロと、汝等に挨拶す。三 主にありて此の書状を寄けるわれテラテオ、汝等に挨
 拶す。三 われと全集會の宿主なるガイオヌと汝等に挨拶す。世の幸なるエラスト及び兄弟ク
 ヲルト、汝等に挨拶す。四 我等の主イエスキリストの恵、すべて汝等のうちに「あれ。ア
 ムン。

ひ、すべての國人に信仰に願ふべきことを知りしめられたる。ニ 奧義の啓示によれる我が福
 音、即ちイエスキリストの宣教に備ひて、汝等を暁うすることを能くし給ふ者に、三 唯一の
 智き神に、イエスキリストによりて、世々に至るまで彼に榮光「あれ」アメン。

ケンクレヤの集會の事へ人なるフイニに托して、コリントよりローマ人に書き贈れり。

ローマ人に贈れる使徒パウロの書状 終り

コリント人に贈れる使徒パウロの書状 第壹

第一章

パウロ、神の意によりてイエスキリストの召されたる使徒及び兄弟なるコリントに、

集會に、彼等の處にても我等の處にても判る處にて、我等の主イエスキリストの名を呼び頼む

すべての者と同一に、召されたる聖徒等に「願ふ」我等の父なる神及び主イエスキリストより

聖霊和と汝等に「あれ」

「われキリストイエスに在りて、汝等に與へ給ひし神の恵のために、汝等に就きて恒に我が

神に感謝しまつる。キリストの證、汝等のうちに堅うせられしによりて、大汝等はすべて

の事「即ち」すべての言と、すべての知識とに、彼に在りて富ましめられたればなり。そ

れば汝等は我等の主イエスキリストの顯現を待ちつ、一つとして進に後れたることなし。キ

彼は終に至るまで汝等を堅うし給ひ、イエスキリストの目に實むべきところなき者たらしめ給

はん。神は信なる者、彼によりて汝等はその子、我等の主なるイエスキリストの親しき交に

まで召されたり。

「兄弟と、我等の主イエスキリストの名によりてわれ汝等に勸む、汝等みな云ふことを同

じうし、且つ汝等のうちに靜のなからんことを、また汝等揃つて同じ思に、また同じ見解にあらんことを。一 是は兄弟よ、我は汝等に就きてコロエの一家の者より、汝等のうちに靜ありと我に知らしめられたればなり。二 されば我これを云はん、即ち汝等のお、我はバカロのもの、また我はアボのもの、また我はクバのもの、また我はキリストのものなり、と云ふなり。三 キリストは汝等に代りて十字架につけられしや、或ひは汝等はバカロの名に入れてバブラスマセラレしや。四 われ神に感謝しまつる、我はクリスボとガイオスの外、汝等のうちの一人をもバブラスマセラしことを。五 これ我が名に入れてバブラスマセラり、誰も云ふことなからんためなり。六 また我はメラハノの家の者をもバブラスマセラり。その餘に我は誰をかバブラスマセラしことあるや否やを知らず。七 是はキリストは我をバブラスマサするために使はし給ひしにあらず、されど福音を宣傳するためなればなり。昔の知識をもてにあらず、是れキリストの十字架の強しくならざらんためなり。八 是は十字架の責は正なる者には思なるものなれども、赦はれたる者なる我等には聊の力なればなり。九 是は、われ智者の知を正し、識者の識をば偽密すべし、と敏されたればなり。一〇 智者いづくに「ある」聖者いづくに「ある」此の世の論者はいづくに「ある」神は此の世の知識を愚ならしめ給はざりしや。二 故に神の智慧に於て、世は智慧の故に神を知らざりき、神は愚教の愚なるによりて信する者を欺ふを悦び給へり。三 エマナ人は徳を求

め、キリスト人は智慧を求む。三 されど我等は十字架につけられ給ひしキリスト、エマナ人は如何にも賢、またキリスト人には愚なる者、四 されど召された者には、エマナ人にもまたキリスト人にも、神の力また神の智慧なるキリストを賞ぶ。五 是れ神の恩は人よりも御く、また神の弱は人よりも強きが故なり。六 是は兄弟よ、汝等の召されたる者を視よ、智き者多かり、力ある者多かり、出生賢き者多からざればなり。七 されど神は智き者を恥ぢしめんために、世の愚なるものを選び給ひ、また神は強き者を恥ぢしめんために、世の弱き者を選び給へり。八 また神は有なるものを正し、世の卑しきもの、輕しめらるもの、有ならざるものを選び給へり。九 是れ彼の面前にすべての内の誇ることをなからんためなり。一〇 されど汝等は彼につきてキリストイエスのうちに在り、彼は神より我等のために、智また強また理また敏とせられ給へり。一一 即ち、誇る者は主に在りて誇るべし、と敏されたるが如し。一二 兄弟よ、われ汝等の許に到りしとき、言あるひは智慧の働きたるに預ひて、汝等に神の靈を置べんとて到らざりき。一三 是は我はイエスキリストを、即ち十字架につけられ給ひたる此の罪を「知る」の外、汝等のうちに何をも知るまじと定めたればなり。一四 且つ我は弱をもて、また懶をもて、また多くの懶をもて、汝等と併におりき。一五 また我が昔即ち我が説教は、人の智慧の美はしき言に於てせず、されど靈と力との共に於てせり。一六 是れ汝等の、仰は人の智慧の力のうちにあらず、されど神の力のうちにあらんためなり。

第二章

コリント人への第一書状 第二章 四三一

*また我等は完き者のうちに智慧を語たる、されど此の世の智慧にあらず、また此の世の愚らんとする長等の「智慧」にもあらず。されど我等は真義に於ける神の智慧（即ち神が世の長等のうちに一人もこれを知る者なし。そはもしこれを知りたりしならんには、彼等は榮光の圭を十字架につけざりしなるべければなり。されど鑿して、神が彼を覆する者のために備へ給ひしものは、目見しことなく、また耳聞きしことなく、また人の心に上ほりしことなきものなり、とあるが如し。然るに神はその靈によりて我等に啓示し給へり。そは靈はずべての事を覆り、また神の深きことをも（覆り給へば）なり。一そは人の事はそのうちにあるところの、人の靈の外に誰か知らんや。かくの如く神の事は神の靈の外に、一人もこれを知るものなければなり。二されば我等は此の世の靈を受けしにあらず、されど神よりの靈なり、これ神より我等に與へ給ひし事を知るためなりしなり。三我等の語たるところは人の智慧の教ふる言をもてするにあらず、聖靈の教ふる「言」をもて靈なる事を解くなり。四されど血氣の人は神の事の事を受けず、そは彼には愚なることなればなり。五つ「これを知ること能はず、そは靈的に辨へらるべきが故なり。五されど靈なる者はすべてこの事を辨ふ、されど彼は誰よりも辨へらるることならん。六誰か主の思を知りしや、誰か彼を誨へ申さんや。されど我等はキリストの思をもつたり。

第三章

兄弟よ、われ汝等に語たるに疑なる者に對するが如くするに能はざりき。されど内なる者に對するが如く、キリストに在る小兒に對するが如くせり。二われ汝等に情を飲ましめて貪慾を「與へ」ざりき。そは汝等は「喰ふこと」能はざりしが故なり、されど今も何は能はず。三そは汝等は「今」なほ肉なる者なればなり。そは汝等のうち如と辭と分とあればなり。これ「汝等は肉なる者にして、人に稱ひて歩むならずや。四そは或る者は、我はバカロのものなり、と云ひ、また他の者は、我は「プロポ」のもの（なり、と云ふ）ときんば、汝等は肉なる者にあらずや。

五是の故にバロは誰なるや、また「プロポは誰ぞ」汝等のこれによりて信ぜしところの事一人にして、主が「おのにおのに與へ給ひし如く」爲しに「過ぎんや。六我は稱きたり、プロポは水灌けり、されど神は膏て給へり。七されば膏て給ふ神のほか、灌ぐる者も水灌ぐる者も教ふるに足らず。八されば灌ぐる者と水灌ぐる者とは一なり、おのおの己の勞に稱ひて己が報を受けん。九そは神の、我等は同勞者にして、汝等は神の鼻、神の建物なればなり。一〇我に與へ給ひし神の靈に稱ひて、我は御き建築士の如く礎を据ゑたり、かくて他の者は家を建てん。されどおのおの如何にこれを建つべきかを視よ。二そは誰も「既に」置きたるところの外に、別の礎を据うるに能はざればなり。その「礎」は「イエス」(即ち「キリスト」)なり。三されば誰ぞもし此の礎の上に金、銀、珠、寶石、木、草、藁をもて家を建てなば、三おのの行は顯

になり、¹「それはかの日」これを知らしむべければなり、²それは火にて顯現するが故なり、³かくておのおの行の種類如何を、その火「これを」⁴驗すべし、⁵「⁶或る者」⁷もし⁸或る者の家を建てる⁹存¹⁰存¹¹せば、¹²彼は報を受くべし、¹³「¹⁴或る者」¹⁵行¹⁶もし¹⁷燒き燼されたらんには、¹⁸彼は損を蒙るべし、¹⁹されど²⁰己自ら²¹はかく²²火を経たる者として²³救はれん、²⁴汝等は神の聖所に²⁵して、²⁶神の榮光等のうちに住み給ふことを²⁷知らざるか、²⁸「²⁹もし³⁰誰ぞ神の聖所を³¹攫ちば、³²神は此の者を³³擄り給ふべし、³⁴その聖所は³⁵聖なるべければなり、³⁶「³⁷誰ぞ³⁸己自らを³⁹欺く勿れ、⁴⁰もし汝等のうちにて、⁴¹誰ぞ此の世に於て⁴²智き者たりと思はば、⁴³智き者とならんために、⁴⁴愚なる者となるべし、⁴⁵「⁴⁶そは此の世の⁴⁷智識は、⁴⁸神の前には⁴⁹愚なればなり、⁵⁰そは、⁵¹彼は⁵²智者を⁵³彼等の巧にて⁵⁴捕へ給ふ、⁵⁵と⁵⁶錄され⁵⁷たればなり、⁵⁸「⁵⁹且つ復た、⁶⁰主は⁶¹智者の⁶²嘲者を⁶³徒然たり、⁶⁴と⁶⁵知り給ふ、⁶⁶「⁶⁷誰は⁶⁸誰も⁶⁹人に⁷⁰於て⁷¹誇る勿れ、⁷²そは⁷³すべて⁷⁴のものは⁷⁵汝等のものなればなり、⁷⁶「⁷⁷三⁷⁸或ひは⁷⁹バ⁸⁰ロも、⁸¹或ひは⁸²ア⁸³ポロも、⁸⁴或ひは⁸⁵世も、⁸⁶或ひは⁸⁷生も、⁸⁸或ひは⁸⁹死も、⁹⁰或ひは⁹¹現に在るものも、⁹²或ひは⁹³將に⁹⁴在らんとするものも、⁹⁵みな⁹⁶汝等のものなり、⁹⁷「⁹⁸三⁹⁹されど¹⁰⁰汝等は¹⁰¹キリストのもの、¹⁰²また¹⁰³キリストは¹⁰⁴神のものなり」。

第四章

故に人宜しく我等をキリストの使丁の如く、また神の奧義の家宰の「如く」¹ 御へべし、²「³さればその⁴御は、⁵家宰等のうち⁶に⁷信なる者⁸の見出ださるること⁹を¹⁰察むべし、¹¹「¹²されど¹³われ汝等に¹⁴親かれ、¹⁵或ひは¹⁶人の¹⁷親にて¹⁸親かるること¹⁹は、²⁰我にとりて

最小き事なり、我も己自らを¹親かす、²「³そは我は己らのうちに何をも⁴認めざればなり、⁵されど⁶我はこれを⁷もて⁸義とせられたるに⁹あらず、¹⁰我を¹¹義き給ふ者は¹²主なり、¹³「¹⁴三¹⁵されば¹⁶暗の¹⁷秘め事を¹⁸明かにし、¹⁹また²⁰心の²¹謀り²²を²³顯になし給ふ²⁴主の²⁵罰²⁶に²⁷なし給ふ²⁸まで、²⁹期に³⁰先³¹立ちて³²何をも³³欺く勿れ、³⁴そのとき³⁵義は³⁶神より³⁷おの³⁸おの³⁹にあるべし、⁴⁰「⁴¹兄弟よ、⁴²われ汝等の⁴³録されたるところに⁴⁴過ぎて⁴⁵念ふまじきことを、⁴⁶我等に⁴⁷於て⁴⁸擧げんため⁴⁹に、⁵⁰此等の⁵¹事を⁵²移して⁵³我と⁵⁴ア⁵⁵ポロに⁵⁶比へたり、⁵⁷これ⁵⁸汝等の⁵⁹一は⁶⁰一を⁶¹上げ、⁶²他を⁶³貶して⁶⁴傲ぶること⁶⁵と⁶⁶なからんためなり、⁶⁷「⁶⁸誰か⁶⁹汝等を⁷⁰區別せしむるや、⁷¹また⁷²汝等は⁷³何の⁷⁴受けざりしものをもつや、⁷⁵されど⁷⁶汝等もし⁷⁷受けなば、⁷⁸受けしことなきが⁷⁹如く⁸⁰何故に⁸¹傲るや、⁸²「⁸³人既に⁸⁴汝等は⁸⁵稱かされたなり、⁸⁶既に⁸⁷汝等は⁸⁸留まされたり、⁸⁹汝等は⁹⁰我等を⁹¹離れて⁹²王たり、⁹³されど⁹⁴我等も⁹⁵汝等と⁹⁶同に⁹⁷王たらんために、⁹⁸われ⁹⁹傳に¹⁰⁰汝等の¹⁰¹王たらんことを¹⁰²稱ふ、¹⁰³「¹⁰⁴そは¹⁰⁵われ¹⁰⁶思ふに、¹⁰⁷神は¹⁰⁸われ¹⁰⁹使徒等を¹¹⁰先罪に定められたる者の¹¹¹如く、¹¹²未なる者として¹¹³見はし給ひたればなり、¹¹⁴そは¹¹⁵我等は¹¹⁶世の¹¹⁷看物、¹¹⁸即ち¹¹⁹天使等¹²⁰また¹²¹人々の¹²²「看物」¹²³になりたればなり、¹²⁴「¹²⁵我等は¹²⁶キリストのために¹²⁷愚なる者、¹²⁸されど¹²⁹汝等は¹³⁰キリストに¹³¹ありて¹³²愉き者なり、¹³³我等は¹³⁴弱く¹³⁵汝等は¹³⁶強し、¹³⁷汝等は¹³⁸尊く¹³⁹我等は¹⁴⁰賤し、¹⁴¹「¹⁴²二¹⁴³現時に¹⁴⁴至るも¹⁴⁵我等は¹⁴⁶飢ゑ、¹⁴⁷また¹⁴⁸渴き、¹⁴⁹また¹⁵⁰搦られ、¹⁵¹また¹⁵²搦られ、¹⁵³また¹⁵⁴定められる住家なし、¹⁵⁵「¹⁵⁶且つ¹⁵⁷我等は¹⁵⁸手づから¹⁵⁹働きて¹⁶⁰勞し、¹⁶¹罵られて¹⁶²祝禱し、¹⁶³追害せられて¹⁶⁴堪へ¹⁶⁵忍び、¹⁶⁶「¹⁶⁷三¹⁶⁸問さるるときは¹⁶⁹勲を¹⁷⁰なす、¹⁷¹現に¹⁷²我等は¹⁷³世の¹⁷⁴屑の¹⁷⁵如く、¹⁷⁶すべて¹⁷⁷の¹⁷⁸物の¹⁷⁹屑の¹⁸⁰「¹⁸¹如く」¹⁸²になれり、¹⁸³「¹⁸⁴二¹⁸⁵われ¹⁸⁶汝等を¹⁸⁷辱しめ

「¹兄弟よ、²われ汝等の録されたるところに³過ぎて⁴念ふまじきことを、⁵我等に⁶於て⁷擧げんため⁸に、⁹此等の¹⁰事を¹¹移して¹²我と¹³ア¹⁴ポロに¹⁵比へたり、¹⁶これ¹⁷汝等の¹⁸一は¹⁹一を²⁰上げ、²¹他を²²貶して²³傲ぶること²⁴と²⁵なからんためなり、²⁶「²⁷誰か²⁸汝等を²⁹區別せしむるや、³⁰また³¹汝等は³²何の³³受けざりしものをもつや、³⁴されど³⁵汝等もし³⁶受けなば、³⁷受けしことなきが³⁸如く³⁹何故に⁴⁰傲るや、⁴¹「⁴²人既に⁴³汝等は⁴⁴稱かされたなり、⁴⁵既に⁴⁶汝等は⁴⁷留まされたり、⁴⁸汝等は⁴⁹我等を⁵⁰離れて⁵¹王たり、⁵²されど⁵³我等も⁵⁴汝等と⁵⁵同に⁵⁶王たらんために、⁵⁷われ⁵⁸傳に⁵⁹汝等の⁶⁰王たらんことを⁶¹稱ふ、⁶²「⁶³そは⁶⁴われ⁶⁵思ふに、⁶⁶神は⁶⁷われ⁶⁸使徒等を⁶⁹先罪に定められたる者の⁷⁰如く、⁷¹未なる者として⁷²見はし給ひたればなり、⁷³そは⁷⁴我等は⁷⁵世の⁷⁶看物、⁷⁷即ち⁷⁸天使等⁷⁹また⁸⁰人々の⁸¹「看物」⁸²になりたればなり、⁸³「⁸⁴我等は⁸⁵キリストのために⁸⁶愚なる者、⁸⁷されど⁸⁸汝等は⁸⁹キリストに⁹⁰ありて⁹¹愉き者なり、⁹²我等は⁹³弱く⁹⁴汝等は⁹⁵強し、⁹⁶汝等は⁹⁷尊く⁹⁸我等は⁹⁹賤し、¹⁰⁰「¹⁰¹二¹⁰²現時に¹⁰³至るも¹⁰⁴我等は¹⁰⁵飢ゑ、¹⁰⁶また¹⁰⁷渴き、¹⁰⁸また¹⁰⁹搦られ、¹¹⁰また¹¹¹搦られ、¹¹²また¹¹³定められる住家なし、¹¹⁴「¹¹⁵且つ¹¹⁶我等は¹¹⁷手づから¹¹⁸働きて¹¹⁹勞し、¹²⁰罵られて¹²¹祝禱し、¹²²追害せられて¹²³堪へ¹²⁴忍び、¹²⁵「¹²⁶三¹²⁷問さるるときは¹²⁸勲を¹²⁹なす、¹³⁰現に¹³¹我等は¹³²世の¹³³屑の¹³⁴如く、¹³⁵すべて¹³⁶の¹³⁷物の¹³⁸屑の¹³⁹「¹⁴⁰如く」¹⁴¹になれり、¹⁴²「¹⁴³二¹⁴⁴われ¹⁴⁵汝等を¹⁴⁶辱しめ

んとて此等の事を棄くにあらず、されど愛せらるる我が兄弟等の如くに歸すなり。二、是は假令汝等はキリストに於ける憐、慈愍ありとも、父は多くあることなればなり。是は福音に於て、我に做ふ者となりんことを。一、此のゆゑにわれ汝等にテモ子を遣はせり、彼は愛せらるる我が見にして、主に在りて信なる者なり、彼は到る處にて聚會ごとくに、我が教へしところに宿ひて、キリストに在る我が道を、汝等に惚ひ出さしむべし。八また或る者は汝等の許に、我が來ることなしとして做ぶたり。九、されど主とし給はば、われ速に汝等の許に到らん、かくて做ぶ人々の言にあらず、その力を知るべし。三、是は神の國は言のうちに在るにあらず、されど力のうちにあればなり。三、汝等は何を欲するや、答をもて汝等の許にわれ到るべし、或ひは愛と柔和の靈をもて「到るべき」か。

第五章

汝等のうちに淫行「あり」といふに聞ゆ、かかる淫行は國人のうちにてもあらざる程にて、或る者はその父の妻をもつと云はる。二、かくて汝等は做がれども、かかる行を爲す者の汝等のうちより除かるために、反つて悲しまさるか。三、是はわれ體にては「汝等のうち」に居ざれば、靈にては居るが故に「我が」居りての如く、かかる事を行ひし者を既に棄き、四、我等の主イエスキリストの方に仰ふて、我が靈の汝等と共に歸まりしとき、我等の主イエスキリストの名に於て、五、かくの如き者を主イエスの日に於て、その靈は

敬はるやう、その肉をばすために「これを」サマナに付せり。六、汝等の語るとは其からず。汝等小きパン種は粉の塊を全く取れしむることを知りざるか。七、是の故に汝等はパン種なき者なるが故に、新しき地ならんために、新きパン種を淨め去れ。是は我等のために我等の邊越キリストは解かれ給ひたればなり。八、故に我等は舊きパン種もてにありず、また惡と邪とのパン種もてにもありず、されど種なき眞實と眞理との「パン」をもて御食をなすべきなり。九、われ汝等に善狀のうちに、淫行する者と交はること勿れと警けり。一〇、されど此の世の慾深き者、或ひは淫ふ者、或ひは偶像に服事する者と一切「交はる勿れ」とにはあらず、若し然せば、汝等は世より出で往かざるを得ず。一、されど今は兄弟と稱ふる者、もし淫行する者、或ひは淫深き者、或ひは偶像に服事する者、或ひは酒に酔ふ者、或ひは淫ふ者、或ひは淫らば、共に交はることなく、かくの如き者と共に處するさへ爲す勿れ、と汝等に警けるなり。三、外の者を裁くことは我に何ぞや。汝等の裁くは内のものならずや。三、されど神は外の者を裁き給ふ、されば汝等は汝等のうちより惡しき者を除くべし。

第六章

汝等の或る者は他の者に逆らひて事あるとき、敢て裁しからざる者の前に歸へて、聖徒等の前に「訴へ」ざるか。三、汝等は聖徒等の世を裁くべきことを知らざるか、世もし汝等に裁かるならば、汝等は最小き事を裁くに似せざらんや、三、汝等知らざるか、我等は天使等を裁くべきことを、況んや所帯の事をや。四、是の故に汝等もし所帯

の事に保はりて我らば、懲育のうちにて最も小さく見らる者、それらを「裁き座に」坐せしめよ。五汝等を耻ぢしむるために我云はん、かく汝等のうちに、彼の兄弟の間を裁くことを得べき、智き者一人だにあじさるか。六然るに兄弟は兄弟を誹へ、且つこれを不信者の前に爲すか。七是の故に既に汝等己自らうちに訟あるは、全く汝等の過たり。何故に聖父不義を受けざるか、何故に聖父欺かれざりしか。八然るに汝等不義し且つ欺く、即ち兄弟に對して此等の事を爲す。九或ひは汝等は、義しからざる者の神の國を騙ぐべからざることを知らざるか。惡ふ勿れ、淫行する者も、また偶像に服する者も、また淫淫する者も、また男娯となる者も、また男色を行ふ者も、一〇また盜する者も、また燃燻き者も、また酒に酔ふ者も、罵る者も奪ふ者も、神の國を騙ぐべからざるなり。一一「汝等のうち、或る者はかくの如き者なりしが、主イエスの名に於て、我等の神の靈にて洗はれ、また聖められ、また義とせられたり。一二我のためにはすべての物律し、されとすべてのもの益をなすにあらす。我のためにはずてのものを律し、されど我はその何物にも拘せられず。一三食慾は腹のためにして、腹は食慾のためなり。されど神はこれらも此等も無用ならしめ給はん。體は淫行のためにあらす、されど主は體のためなり。一四また神は主を起し給ひたれば、その力によりて我等をも起し給ふべし。一五汝等知じざるか、汝等の體はキリストの體なることを。是の故にキリストの體を取りてこれを「遊女の體となすべきか、有るまじきことなり。一六或ひは汝等知

らざるか、遊女に拘く者は「彼と一體なることを、それは、二者一つの身たるべし、と彼は述べ給へばなり。七されど主に拘く者は「彼と」一つの體なり。一八淫行を避れよ。人の犯すところのすべての罪は體の外にあり、されど淫行する者は己が體に這りひて罪を犯すなり。一九或ひは汝等知らざるか、汝等の體は汝等のうちに抑はず聖靈の聖所にして、神より賜はりたるものなれば、己自らのものにおらざることを。二〇是汝等は價をもて買はれたればなり。是の故に「神のものたる汝等の體をもて、また汝等の靈をもて、尤に神を頌めまつれ。」

第七章

されど汝等の我に響き「贈り」し事に就きては、人に婚の拘らざるを畏れず。されど淫行のゆへに、男はおの己が妻をもち、婦はおの己が夫をもつべし。三夫は妻にその分を盡し、妻も夫にその如くすべし。四妻は己が體の上に權をもたす、されど夫は己が體の上に權をもつ。五互に許して、暫く斷食に、また癖に時を致すための外は、相阻む勿れ。かくて復た同じ處に同に来るべし、これ汝等の情の拘し難きに乗じて、サタナの汝等を試むることなからんためなり。六されど我のかく云ふは許すなり、命するにあらす。七そは我はずての人の、我がであらむ如くにあらんことを欲すればなり。されどおのおの神より己が賜物を受く、此はこれの如く彼はかれの如し。八われ婚姻せざる者また妻に云はん、もし我の如くにして居らんば、彼等のために良し。九されどもし自ら制すること能はずは、婚姻すべし。そは婚姻するは「爾の

火の燃ゆるより勝ればなり。一〇 されどわれ婚姻せし者に命ず、我にあらざれば主たり、
 妻は夫より別る勿れ。一 されど彼もし別れなば、婚姻せずして居るべし、然らざれば夫を稱
 べし。また夫は妻を去る勿れ。二 我その餘の者に云はん、主の云ひ給ふにあらず、或
 る兄弟もし不信者なる妻をもち、已と共に彼の住むを請はば、これを去る勿れ。三 また不信
 者なる夫をもつ妻にして、已と共に彼の住むを請はば、これを去る勿れ。四 是非不信者なる
 夫は妻に於て聖められ、また不信者なる妻は夫に於て聖めらるればなり。然らざれば汝等の兒
 等は淨からず、されど今は聖なる者なり。五 もし不信者自ら別れなば、別れしめよ。かくの
 如き場合に於て、兄弟或ひは姉妹は奴隷たるに及はず、神は我等を平和のうちにお召し給ひしな
 り。六 妻よ、汝いかで夫を敬ひ得るや否やを知るか。或ひは夫よ、汝いかで妻を敬ひ得るや
 否やを知るか。七 然らずんば神のおのおのに宛ち給ひし如く、主のおのおのを召し給ひし如
 く歩むべし。すべての聖徒に於て我が指圖するはかくの如し。八 誰か倒置せられて召されし
 者あるか、倒置を廢つる勿れ。また無割懸にて召されし者あるか、倒置せらるる勿れ。九
 樹體も無なり、また無割懸も無なり、されど神の識を護るは有なり。一〇 主のおの召された
 る召、そのうちに居るべし。二 汝は奴隷にて召されしか、思ひ取ふ勿れ。されど自由人になる
 を得ば、學用ふべし。三 是は召されて主に在る奴隷は、主の自由になされたる者なれば
 なり。かくの如く、召されたる自由人は、キリストの奴隷なり。三 汝等は例をもて買はれた

り、人の奴隷となる勿れ。二 兄弟よ、主のおの召されしところ、そのうちに於て剛ともに居
 るべし。三 處女に就きては我「いま」主の命を有せず、されど主より懲を蒙りて、信なる者たるを
 得たれば、我が見解を與へん。六 是の故にわれ思ふに、此は差し迫れる必要のために良きな
 り、即ち人そのままたにあるは良し。七 汝は妻のために繋がるか、離かれんことを棄むる
 勿れ。汝は妻より釋かれしか、妻を棄むる勿れ。八 されど汝もし婚姻したりとも、罪を犯しし
 にあらず。また處女もし婚姻したりとも、罪を犯ししにあらず。されどかくの如き人々は肉に
 於て蕪あらん、さればわれ汝等につきて惜む。九 我これを述べん、兄弟よ、期は迫れり、餘
 るところは、妻ある者は無きが如く、三 また泣く者は泣かざるが如く、また喜ぶ者は喜ばざ
 るが如く、また買ふ者は有たざるが如く、三 また世を用ふる者は用ぬ慈きざるが如くにあら
 ん、是は此の世の態は過ぎ去るべければなり。三 されどわれ汝等の心遣ひすることなからん
 ことを欲す、婚姻せざる男子は、如何にして主に専はるべきやと、主の事のために心遣ひす。
 三 されど婚姻せし男子は、如何にして妻に専はるべきやと、世の事のために心遣ひす。四
 妻と處女とは別なり。婚姻せざる女子は、體に於ても靈に於ても、聖くあらんとて主の事のだ
 めに心遣ひし、婚姻せし女子は、如何にしてその夫に専はるべきやと、世の事のために心遣ひ
 す。五 されど汝等自らの益のために、我これを云はん、われ汝等に禁案を傳へんためである

子、反つて宜しきに通へることのために、汝等の安らかに落ち着きて主に待らんためなり。
 三 誰かもしその處女につき、宜しきに適はずと思ひ、その盛の時を過し、且つその如く
 せざるを得ざることあらば、その欲するところを偽しめし、罪を犯すにあらず、彼等をして
 婚姻せしめよ。三 されど彼もしその心のうちに堅く立ち、必理のこともなく、また己が意に
 就きて權をもち、且つその處女を睡るべくその心に定めたば、その爲すところ真し。三 され
 ば嫁がしむる者も、その爲すところ真し、されど嫁がしめざる者は、その爲すところ更に良し。
 三 凡そ妻はその夫の生くるうち、宛にて繋がる。されど夫もし眠らば、己が欲する者と婚姻
 するも自由なり、唯主に在る者とのみすべし。四〇 されどかの婦、もし我が昇解に預ひてそ
 のままに居らば、更に願なる者なり。我も神の意を待たりと思ふ。

第八章

偶像に獻げし物に就きては我等みな知識あることを知る。知識は假ぶらむ
 されど愛は徳を建つ。二〇 もし誰か知れりと思はば、彼は知らざるべからざる
 程をも知らざるなり。三 されど誰かもし神を愛せば、此の者は彼より知られたるなり。四 是の
 故に偶像に獻げたる物を食することに就きては、われら偶像の世に無きものなること、即ち一
 の外に神のおはさぬことを知る。五 是は如何にも偶像と云はるもの、或ひは天にもあり、或
 ひは地にもあり、多くの神、また多くの主あるが如しと雖ども、六 我等には父なる一の神にお
 はすのみすべこのもの彼につき、我等は彼のためなり。また一「人の主イエスキリスト

第九章

我は使徒にあらずや、我は自由人にあらずや、我等の主なるイエスキリス
 トを我は親しにあらずや。二 われ他の者には使徒にあらずとも、汝等には「使
 徒」なり。そは我が使徒の職の印は、主に在りて汝等なればなり。三 我を殺す人々に對する我
 が辨明はこれなり、四 我等は喰ふことまた飲むこととの權を有せざるか。五 我等は他の使徒等、
 また主の兄弟等、またケバの如く、姉妹なる妻を携ふるの權あらざるか。六 或ひは我とケバナ
 バのみ、獨くに及ばざる權なきか。七 誰か己が費用にて、兵卒として勤むる者曾てあらんや。

「おはしますべ、すべてのもの彼によりて「存し、我等も彼によりて存す」。とされどすべての
 者この知識あるにあらず、現に或る者は偶像の良心をもて、偶像に獻げたる物としてこれを食
 す、乃ちその良心弱くして汚るなり。八 食は我等を神に汚ゆ、我等はこれを喰ふとも益
 することなく、また嘔はずとも損することなし。九 されど親友、然らずんば汝等このこの權は、
 弱き者のために廢たされん。一〇 如何となれば、誰かもし汝等知識ある者の、偶像の宮にて座
 に着くを見ば、弱き彼の良心は、偶像に獻げたる物を食すべく構成せられざらんや。二 かく
 て弱き兄弟は、汝の知識にてにぶるならん、彼のためにキリストは死に給ひしなり。三 され
 ばかく兄弟に廻らひて罪を犯し、また弱き彼等の良心を傷ふは、キリストに廻らひて罪を犯す
 なり。三 かるが故に食はし我が兄弟を誤かしめば、我が兄弟を誤かしめざらんために、我
 は必ずいつまでも肉を喰はじ。

誰が御欄園を任立て、その實を食せし者あらんや。或ひは誰か羊を牧ひて、その乳を食せざる者あらんや。人われ人に預ひて此等の事を語たらんや。或ひは徒も此等の事を云ふにあらんや。九それはモラゼの徒のうち、器物を贖す牛に口羅すべからず、と録されたればなり。神は牛のために償ひ給へるか、一或ひは一切我等のゆへに云ひ給ふや、我等のゆへに贖されたるなり。それは辨す者は盟をもて辨すべし、また器物を踏む者は、その望たる〔器物を〕共に享くる望をもて〔踏む〕筈なればなり。一我等も七挺なる物を汝等のために擲きしならば、汝等の肉なる物を握らんとするとも大事ならんや。二他人々も汝等の上に此の權を非にまたば、我等は尙ほ勝らんや。されど我等は此の權を用ゐず、反つてキリストの福音の如とならざるやう、すべての事を埋ふ。三汝等知らざるか、神殿の事に働く者は神殿の「もの」を食し、祭壇に侍する者は祭壇の頃に與ることを。四かくの如く、主も福音を宣傳ふる者には、福音にて生くることを命じ給へり。五されど我等は少しも此等の事を用ゐざりき。また我等はかくの如く我にならんとために、此等の事を書きしにあらんや、それは我が誇ることを人に空しうせらるるよりは、寧ろ死ぬるは我がために良ければなり。六それはわれ福音を宣傳ふるども、我に誇るべきことなればなり、それは必要我に迫ればなり、されば我もし福音を宣傳へずは恥ぢにたるべし。七それは我もし喜びて此の事を爲さば、報を得ん、されど假令喜ばずとも、その處置は我に委ねられたればなり。八是の故に我がために報は何なるや。われ福音を宣傳ふるに、キ

リストの福音をして我を要することなからしめ、また福音に於ける我が權を用ゐる事をせざることなり。一我はすべて「人」に對して自由人なれども、更に多くの者を得んために、己自らすべての人の奴隷となれり。二即ち我はエヂヤには、エヂヤ人を得んために、エヂヤ人の如くなれり。三また捉なき者には、われ神に對ひて捉なきにあらんや、キリストに對ひて捉のうちにあれど、捉なき者を得んために、捉なき者の如くなれり。三われ弱き者には、弱き者を得んために、弱き者の如くなれり。すべての者には、すべての者の如くなれり。是れ如何にして難をか致はんためなり。三われ福音のゆへにかく我等は彼等と共にこれに與る者とならんためなり。四汝等知らざるか、亂せ場に於て走る者はみな走れども、彼美を受くる者は一「人」なることを。かくの如く汝等も受けんために走れ。五されどすべて關ふ者はすべての事に自制す、彼等は朽ち易き冠を受けんためにす、されど我等は朽ちぬ冠を受けんためなり。六我は是の故にかくの如く走る「なり」、目標なきが如くにあらず。我はかくの如く人々を誘ふ、空を躍つが如きにあらず。七我は我が權を打ち擲き、且つこれを奴隷たらしむ。然らずんばわれ教を他に脱きて、己自らは棄てられたる者とならん。

第十 章

兄弟と、われ汝等のこれを知らざるを欲せず、即ち我等の先祖等はみな空の下にあり、また海を過り、三みな靈にて、また海にて、モラゼに入らば

ラマヤせられたり。三またみな同じ靈なる食糧を喰ひ、四またみな同じ靈なる飲物を飲めり、
 彼は彼等は従へる靈なる岩より飲みたまはばなり、此の岩はキリストなりき。五然るに神は
 等の事は、彼等の忿し如く、我等の惡しき事を懲することなからんために、我等の型となれ
 り。七彼等の或る者に依りて、偶像に服事する者となる勿れ。民は坐して喰ひ、且つ飲み、ま
 た立ちて戯れたり、と録されしが如し。八また彼等の或る者の逕行せし如く、われら逕行すべ
 からず、即ち一日に二萬三千人倒れたり。九また彼等の或る者の、試みて蛇に吐ばせられ
 如く、我等キリストを試むべからず。一〇また彼等の或る者の吐きし如く、汝等も吐く勿れ、
 即ち吐す者に吐けさせられたり。一 彼等にふりかかりし、此等の事はみな型にて、世の終に到
 り濟しし我等を驚かしたるなり。二 されば立てりと思ふ者は、倒れざるやう
 觀るべし。三 汝等が受けし試は人事の當たらざるはなし、神は信なる者、汝等の力に過ぎて
 試みらるるを許し給はず、反つて汝等の耐へ忍ぶことを得んために、試ともに通るべき道を
 備へ給ふべし。四 かるが故に我が驚せらるる者よ、偶像に服事することより遁れよ。五 わ
 れ悦び者に「云ふ」如くに云はん、汝等わが迷ふことを棄け。六 我等が祀ふところの杯は、
 キリストの血の親しき交にあらずや。我等が擧ぐところのパンは、キリストの體の親しき交に
 あらずや。七 パンは一なるが故に我等多くの者は一體なり、それはすべての者は一つのパンと

共に享くればなり。八 肉に俯ふオスマエルを視よ、偶像に飲物を食する者は祭壇に與る者にあらず
 や。九 是の故にわれ何をか述べん、偶像とは何ぞや、或ひは偶像に飲けし物とは如何なる物
 なるや。一〇 されど國人が飲ぶる物は惡鬼に飲ぐるに、神に「飲ぐるに」あらず。さればわ
 れ汝等が惡鬼どもと、親しく交はる者となるを欲せず。二 汝等は主の杯と惡鬼の杯とを飲む
 を得ず、主の食卓と惡鬼の食卓とを共に享くるを得ず。三 或ひは我等主の杯を蓋き起さんと
 するか、我等は彼より強き者なるか。三 我にとりてはすべての物律し、されどすべての物益
 あるにあらず。我にとりてはすべての物律し、されどすべての物益を建てず。四 誰も己自ら
 の事を樂むる勿れ、されどおのおの他のことを樂めよ。五 すべて市場にて賣る物は、良心
 のために調ぶることなくして食せよ、六 是れ地とこれに滿つる物は主のものなればなり。七
 不信者の或る者もし汝等を酬し、また汝等も狂かんと欲せば、汝等に償ふすべての物を良心の
 ゆへに何をも調ぶることなくして食せよ。八 誰かもし汝等に、此は偶像に飲けし物なりとい
 はば、存げし者とその良心とのゆへに食する勿れ、是れ地とこれに滿つる物とは主のものなれば
 なり。九 されどわれ云はん、良心とは己自らの「良心」にあらず、されど他のそれなり。何
 ぞ我が自由を他の良心に裁かることを欲さんや。一〇 われもし謝して共に享くるならば、我は
 何ぞ我が感謝するところの物のために冒さるや。一一 是の故に汝等食するにも、或ひは飲む
 にも、或ひは何事を爲すにも、すべての事を神の榮光のために爲せ。一二 ユダヤ人にも、キリ

シナ人にも、神の集會にも、權となる勿れ。三我のすべての事に於てすべての人を喜ばしめ、
己自らの益を求めず、されど多くの者の救はるために、その「益を樂むるが」如くせよ。

我のキリストに倣ふ者なるが如く、我に倣ふ者となれ。

第十一章

二また兄弟よ、汝等はすべての事に於て我を憶ひ出で、且つ我が汝等に傳

へし如く言ひ傳へし故に、われ汝等を譽む。三されどわれ汝等が、すべての男の頭はキ

リストなり、また婦の頭は男なり、またキリストの頭は神なり、と知らんことを欲す。四すべ

て男は前り或は豫言するに、その頭の上に「物をもつときは、その頭を辱しむ。五されど

すべての婦、その頭を被はずして前り或は豫言するときは、己が頭を辱しむ、それは髪を剃りた

ると一にして、また同じければなり。六婦もし「頭を」被はずは「髪を」剃るべし、されども

し髪を剪り或は剃ること、婦の耻づべきことならば「頭を」被ふべし。七男は神の形と榮光

なれば、その頭を被ふべきにあらざる、されど婦は男の榮光なり。八それは男は婦につきてあら

ざれば婦は男につきてあらばなり。九それは男は婦のゆへに創造せられたるにあらざる、されど婦

は男のゆへなればなり。一〇此のゆへに婦は天使等のゆへに頭に權をもつべき聖なり。一

一は主に在りては男も婦を離れざる、婦も男を離れざる。二それは婦は男につきて「ある」如く、男

も婦のゆへ「なればなり」されどすべてのものは神につきて「あり」三汝等己自らのうちに

て兼つて頭を被はずして神に順は、婦に似含ひたることなるか。四男もし長き髪あらば

取つべきことなりと、自然自ら汝等を敬ぶるにあらざるや。五されど婦もし長き髪あらば、彼

には榮光なり、それは長き髪は彼の代に與へられたればなり。六人もし躬ひ備すべきことあり

と思ふとも、我等はかくの如き例をもたず、また神の集會にもなし。

一七されど我かく命じて懇めざるは、汝等の善きことのために「集ひ来るに」あらざるして、

惡しき事のために集ひ来るが故なり。一八それは先づ汝等が集會に集ひ來るとき、汝等のうちに

靜ありと聞き、われ略これに信すればなり。一九それは汝等のうちに、足とせらるる者の頭にな

らんために、異端も必ず有らざるべからざればなり。二〇是の故に汝等同じ處に集ひ來るは、主

の晩餐を喰ふためにあらざるなり。二一それは曠ふときのおのおの先づ己が晩餐を準備するが故に、

飢うる者あり、酔ふ者あればなり。二三汝等は嘆ひ且つ飲むべき家なきか或は汝等は神の集

會を輕んじ、且つ乏しき者を辱しむるや。われ何をかいはん、足をもて汝等を辱むべきや、聖

めざるなり。二四それは我が汝等に傳へしは、主より授けられたることなればなり、即ち主イエス

付され給ひし夜に於て、パンを取り、言、感謝して擘き且つ曰へり、取れ、喰へ、此は汝等の

ために擘かる我が體なり、我のを憶ひ出づるためにこれを爲せ。二五食して後杯をも同じ擘

にして、云ひ給ひけるは、此の杯は我が血にての斷契約なり、汝等飲むごとく我のを憶ひ出づ

るために、これを爲せ。二六汝等彼の來り給ふまで、此のパンを食しまた此の杯を飲むこと、

主の死を償ふと。二七されば誰にても重きすして、此のパンを食し、或は此の杯を飲む者は、

主の體と血とを「犯す」欲するべし。又されば人己自らを訂すべし、かくて此の宴のうちを食すべし、また此の杯のうちを飲むべし。又それは主の體を辨へずして、¹¹ 値せずして、¹² 食し且つ飲む者は「その」食ひ飲み「反つて」己自らを裁くべければなり。¹³ 此のゆへに汝等のうちに弱き者また病身なる者多く、また眠に就きたる者も數多あり。¹⁴ 我等もし己自らを辨へしならば、裁かれざりしなるべし。¹⁵ されど我等の裁かれたるは、世とともに罪に定めらるることなかるべきために、主より懲しめらるるなり。¹⁶ されば我が兄弟よ、嗚はんため集ひ來るとき、互に待つべし。¹⁷ 且もし飢うる者あらば、家にて食せしめよ、是れ裁のために、汝等の集ひ來ることなからんためなり。されどその餘の事は、われ到りしとき、指圖すべし。¹⁸ 汝等兄弟よ、靈なる「賜物」に就きては、われ汝等の知らざるを欲せず。¹⁹ 汝等國人なりしとき、導かるるままに、物言はざる偶像のもとに、導かれ仕²⁰ したることは、汝等の知るところなり。²¹ かかるが故にわれ汝等に知らしめん、神の靈に在りて語たる者は、²² イエスをアナテマなりと云ふ者なく、また聖靈に在るにあざれば、誰もイエスを主といふこと能はざることを。²³ 又また賜物は種々あれど同じ靈なり。²⁴ 又また奉事は種々あれど、同じ主なり。²⁵ 又また例は種々あれど、すべての者のうちに、すべての事を²⁶ 行ひ給ふ神は同じ。されどおのおのにおのに益を得しめんために、靈の賜を與へ給ふなり。²⁷ 又それは或る者には靈によりて智慧の言を、また或る者には同じ靈に頼りて知識の言を、²⁸ 又また或る者には同じ靈にて傳

第十二章

て、その思し給ふままに、それれおのおのに與ち給ふなり。¹ 二それは體は一つにして多くの肢あり、一つの體のすべての肢は多けれども、體は一つなるが如く、キリストもかくおはせばなり。² 三それは我等、或ひはユダヤ人も、或ひはギリシヤ人も、或ひは奴僕も、或ひは自由人も、みな一體とならんために、一の靈にてアナテマせられ、またみな一の靈を飲むべくせられたればなり。³ 四それは體も一つの肢にあらず、されど多くあればなり。⁴ 五足もし我は手にあらざるが故に、體につきてあらずといはば、これによりて體につきてあざるか。⁵ 六また耳もし我は目にあらざるが故に體につきてあらずといはば、これによりて體につきてあざるか。⁶ 七もし體離く自なれば、聞くところは何處ぞや、もし鼻く聞く處ならば、嗅ぐ處はいづこそや。⁷ 八されど今神はその欲し給ふままに、多くの肢をそれぞれ體に置き給へり。⁸ 九然るにもしみな一つの肢なりしならば、體は何處ぞや。¹⁰ されど今肢は多くあれども、體は一つなり。¹¹ 三目は手に頼りて、われ汝を要せずといふを得ず、或ひは復た頭は足に頼りて、われ汝を要せずといふを得ず。¹² 三されど反つて最も弱しと見ゆる體の肢は、必要なり。¹³ 三また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故

に、¹⁴ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、¹⁵ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、¹⁶ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、¹⁷ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、¹⁸ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、¹⁹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、²⁰ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、²¹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、²² 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、²³ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、²⁴ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、²⁵ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、²⁶ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、²⁷ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、²⁸ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、²⁹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、³⁰ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、³¹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、³² 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、³³ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、³⁴ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、³⁵ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、³⁶ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、³⁷ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、³⁸ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、³⁹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁴⁰ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁴¹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁴² 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁴³ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁴⁴ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁴⁵ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁴⁶ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁴⁷ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁴⁸ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁴⁹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁵⁰ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁵¹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁵² 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁵³ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁵⁴ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁵⁵ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁵⁶ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁵⁷ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁵⁸ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁵⁹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁶⁰ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁶¹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁶² 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁶³ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁶⁴ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁶⁵ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁶⁶ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁶⁷ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁶⁸ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁶⁹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁷⁰ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁷¹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁷² 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁷³ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁷⁴ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁷⁵ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁷⁶ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁷⁷ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁷⁸ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁷⁹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁸⁰ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁸¹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁸² 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁸³ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁸⁴ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁸⁵ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁸⁶ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁸⁷ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁸⁸ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁸⁹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁹⁰ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁹¹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁹² 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁹³ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁹⁴ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁹⁵ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁹⁶ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁹⁷ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁹⁸ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、⁹⁹ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、¹⁰⁰ 又また我等は體の「うち」最も卑しと思ふもの、此等の物に附ほ懸れる故に、

を纏はしむ。かくて我等の脱き處には、尙ほ勝れる美しきあり。二三 されど我等の美しき處は、
 聖あらず。神は劣れる處に、尙ほ勝れる尊を興へて、體を賜へ給へり。三五 是れ體のうちを
 るることなく、反つて肢々互に同じ心くばりを爲さんためなり。二六 さればもし一つの肢も
 まばすべの肢弱に苦しめ、一つの肢ももし榮光を蒙せられたらば、すべての肢共に喜ばん。二七
 乃ち汝等はキリストの體にして、また個々にその肢なり。

二八 されば神が集會のうちに置き給へるものは、第一に使徒、第二に豫言者、第三に教師、
 次に力ある行、次に醫の賜物、助、治、異なる言葉なり。二九 すべて使徒ならんや、すべて
 豫言者ならんや、すべて教師ならんや、すべて力ある行あらんや、三〇 すべて醫の賜物あらん
 や、すべて言葉を講たらんや、すべて醫することを爲さんや。三一 されど汝等勝れる賜物に熱
 心せよ、されば何ほ優れたる道をわれ汝等に與はさん。

第十三章

假令我もろもの人の言葉、また天使の「言葉」をもて語たるとも、愛なく
 ば、我は鳴る鐘、或ひは響く鐃とたる。三假令われ豫言あり、またすべて
 の知識とすべての知識とを知り、また山を移す理なるすべての信仰ありとも、愛なくば我は無
 なり。三假令われ我が有る物物すべてを食物として施し、また族あるために我が體を付すと
 も、愛なくばわれ更に益せられず。四愛は忍び、「また」親切なり、愛は斯ます、愛は務ら
 す、傲ぶらず、五非禮を行はず、己自らの事を察めず、輕々しく怒らず、惡しきを助へず、六不義

に於て喜ばず、されど眞理に於て共に喜び、七すべての事此ひすべての事信じ、すべての事望
 みすべての事耐ふるなり。八愛はいつまでも溢れることなし。されど或ひは豫言も隠り、或ひ
 は言葉も思ひ、或ひは知識も廢らん。九 是は我等の知るは別分にて、また豫言するも部分なれ
 ばなり。一〇 されば完き者の來らんとき、そのとき部分なるは廢るべし。二 われ小兒なりし
 ときは、小兒の如く語たり、小兒の如く念ひ、小兒の如く脚歩せり。されど人と成りしとき、
 小兒の事を捨てたり。二 是は我等現に鏡によりて觀に「これを」觀る、されどそのとき鏡は
 顔に對すべければなり。現に我の知るは部分なり、されどそのときは我、潔かに知らるる如く、
 我も潔かに知らんらん。三 されど今は信仰、望、愛、此等の三つのもの存す、されど愛はそ
 のうちの最も大なるものなり。

第十四章

愛を退ひ求めよ、愛なるものに熱心せよ、殊に汝等の豫言せんために「熱心
 なれ」三 是は言葉をもて語たる者は人に語たるにあり、されど神に「語た
 る」なればなり。それは聞く者なく、望をもて唯真義を語たるのみなればなり。三 されど豫言す
 る者は徳を建て、また養め、また慰むるために人に語たるなり。四 言葉をもて語たる者は己自
 らの徳を建て、豫言する者は衆會の徳を建て。五 されば我は汝等すべての者の、言葉をもて語
 たることを欲すれども、殊に欲するは汝等の豫言することなり。六 是はもし「言葉は」集會これ
 を受けて、徳を建てんために課されずば、豫言する者は、言葉をもて語たる者より勝ればなり。

六 されば兄弟よ、今われ汝等に到り、言葉をもて証したるも、或ひは欺弄をもて、或ひは知識をもて、或ひは虚言をもて、或ひは汝等々に証したるをば、われ何をもて汝等を益すべきや。七 假令無生の物 聲を出すと、或ひは笛も、或ひは笛も、或ひは笛も、もしその音に別なくば、如何にして吹くところ、或ひは擗き鳴らすところを知るべきや。八 また喇叭も、或ひは喇叭も、如何にして吹くところ、或ひは擗き鳴らすところを知るべきや。九 かくの如く舌をもて、汝等も解し易き言を出りなき言を出さば、誰か軍の備をなさんや。九 かくの如く舌をもて、汝等も解し易き言を出さば、如何にして証したることを知るべけんや。それは靈氣に証したる者たるべければなり。一〇 世に聲の類ありて、その類、その如く多くとも、一つとして物言はざるはなし。一 是の故にわれもし聲の力を知らずんば、証したる者に對して我は頂たるべく、証したる者も我には夷なり。二 されば汝等も靈の「賜物」に熱心なれば、集會の徳を建つるために、その靈ならんことを察めよ。三 かくが故に言葉をもて証したる者は、これを譯し得るやう祈るべし。一 回 我もし言葉をもちて祈らば、我が靈は祈るなり、されど我が思は傳を結ばず、五 是の故に如何にすべきや、われ靈をもて祈らん、またわれ思をもて祈らん、われ靈をもて譯め歌はん、またわれ思をもて譯め歌はん。六 然らずんば、汝もし靈をもて配するとも、訓育なき者の場所を充たす者は、汝の云ふところを知らざれば、如何にして汝の感謝に對してアメンと稱ふべけんや。七 汝の感謝するは如何にも良し、されど他の者は徳を建てられず。八 我は我が神に感謝しまつる、汝等のすべてよりも多く言葉をもちて証したることを。九 されど我は集會に於て、

て、言葉をもちて一箇の音を「証したる」よりは、他の者をも訓ふるために、思をもて五つ音を證たらんことを欲す。三〇 兄弟よ、誰に於ては幼児となる勿れ、惡に於ては小兒なれ、また誰に於ては成人となれ。三 掬のうち、われ異なる音をもて、また異なる聲をもて此の民に話たらん、されどかくも彼等は我に聞かざるべし、主云ひ給ふ、と譯されたり。三 されば言葉は微のためにして、信者のためにあり、不信者のためなり。然るに豫言は不信者のためにあらず、されど信者のためなり。三 是の故にもし全集會同じ處に集ひ來り、すべての者言されどもしすべての者豫言せば、不信者或は訓育なき者の入り來り、すべての者より罪を自認せしめられ、すべての者より「是非を」闘べられ、五 かくしてその心の秘密は顯にならん、かくて彼等は瀕を伏せ、實に神は汝等のうちにおはす、と宣つて神に平伏すべし。二九 是の故に兄弟よ、如何にすべきや。汝等の集ひ來るとき、おのおの聖歌あり、歌あり、言葉あり、歌あり、歌あり、響することあり、みな徳を建てんためならしめよ。三〇 もし誰か言葉をもちて話たらんとせば、二「人」或ひは多くとも三「人」順次に循ひて證たり、一「人」これを譯すべし。三一 もし譯する者なくば、彼は集會のうちを黙して、己自らと剛とに証たるべし。三二 また豫言者は二「人」或ひは三「人」話たり、その他の者は辨ふべし。三三 されどもし傍に坐する者黙すを蒙らば、先の者は黙すべし。三 是はすべての者は強び、またすべての者は

勸を受けんために、汝等一人一人が豫言するを得ればなり。三 豫言者の靈は豫言者に服はしめらる。三 彼は彼は亂の神におはさず、平和の神におはせばなり。四 聖徒等のすべての集會に於けるが如し。五 汝等の姉は集會にて黙すべし、それは彼等に語らることを許されず、されど捉も云へる如く、服ふべき者なればなり。五 されど彼等もし何事をか學ばんと欲せば、家にて己が夫に問ふべし、それは集會にて語らるは、婦にとりて耻なればなり。六 或ひは神の言は汝等より出で来りしや、或ひは唯汝等にのみ到り来りしや。七 誰かもし豫言者たりと思ひ、或ひは靈なる者たりと思はば、我が汝等に預き贈る事は、主の命なりと思むべし。八 されど誰かもし知らずば、知らざるに委せよ。九 されば兄弟よ、豫言することに熱心なれ、また音楽をもて語らることを許す勿れ。十 すべての事宜しきに適ひ、且つ序に循ひてあらしめよ。

第十五章

されど兄弟よ、われ汝等に觸音を知らしめたり、その觸音は我が汝等に宣傳せしところ、また汝等の受けしところにて、そのうちに汝等の立つところのものなり。二 汝等もし我が汝等に宣傳せしところを、先づ汝等に傳へたればよりて汝等は救はれてあるなり。三 是はわれも受けしところのこと、先づ汝等に傳へたればなり、即ちキリストは聖書に預ひて、我等の罪のために死に給ひしこと、四 また葬られ給ひしこと、また聖餐に循ひて、三日めに起され給ひしこと、五 また六に現はれ給ひ、後に十二に

「現はれ給ひし」ことなり。六 その後同時に五百以上の兄弟等に現はれ給へり、そのうちの多くの者は現に有ふれども、或る者は眠に就けり。七 その後キリストに現はれ給ひ、後にすべての使徒等に現はれ給へり。八 またすべての終に、早産兒の如き我にも現はれ給へり。九 是は我は使徒等のうちの最も小き者にて、神の集會を迫害せしが故に、使徒と呼ばるるに適はざる者なればなり。一〇 されど神の恵にて我は我なるものなり。且つわれに「賜ひし」彼の恵は空しくならず、反つて彼等すべての者より尙ほ勝りて勞したり。されどこれ我にあらず、我どもなる神の恵なり。一一 是の故に或ひは我も、或ひは彼等も、かくい如く我等は宣へ、またかくの如く汝等は信じたり。二 然るにキリストは死人のうちより起され給へり、と宣へられ給ふとも、如何にして、死人の體はあることなし、と汝等のうちの或る者は云ふや。三 されど給はざりしならば、果して我等の語教は空しく、また汝等の信仰も空し。二五 且つ我等も神の偽證者なることを見出されん。それは死人もし果して起さることなしとせば、起ることなきキリストを、神は彼を起し給へり、と我等は證したればなり。六 是は死人もし起さることなしとなくば、キリストも起され給ふこととさればなり。七 またキリストもし起され給はざりしならば、汝等の信仰は徒勞にして、汝等は何ほ汝等の罪のうちにある。八 さればキリストに在りて眠に就きたる人々も亡びたり。九 我等もし唯此の生に於て、キリストのうちを認め給

くのみならば、我等はすべての人のうちの最も懼むべき者なり。三、されど今キリストは死人のうちより起き給ひて、眠に就きたる者の初穂となり給へり。三、それは人によりて死あるが故に、また人によりて死人の穂あればなり。三、それはアダムに於てすべての者は死する如く、その如くキリストに於てすべての者は活かさるべければなり。三、されどおのおの己が順位に「宿む、即ち」初穂キリスト、次は彼の來臨を「待てる」キリストの人々。三、かくて彼は神即ち父に國を付し給はんとし、またすべての權と力とをばし給はんとし、終つて、三、五、それは必ず彼はすべての敵をその足の下に置き給ふまで、正たらざるべからざればなり。三、天にほされたる最終の敵は死なり。三、それは彼はすべてのものをその足の下に服はしめ給へばなり。されどすべてのものは彼に服はしめられたりといはるときは、すべてのものを服はしめ給ひし彼は、そのうちにおはさざること明かなり。三、されどすべてのものに服はしめ給ふべし。これ神はすべてのに於けるすべてのに於ておはさんためなり。三、さればもし全く死はしめられしとき、そのとき子は已自ちも、すべてのものを己に服はしめ給ひし者に服はしめられ給ふべし。これ神はすべてのに於けるすべてのに於ておはさんためなり。三、さればもし全く死の起さることなくば、死人のためにバプテスマをせられし人々は何を爲すべきや、何故に彼の等は死人のためにバプテスマをせられたるや。三、何故に我等もすべての時危険のうちにある乎。三、我等の主なるキリストイエスに在りて、我が有する我等の壽のために、誓つて我は日に復活して死す。三、もしわれエベツに於て、人に復活して眠ともにもに闘ひたりとも、若し死人の起さ

ることなくんば、我に何の益あらんや。我等は眠はん、また飲まん、それは明日われ死にばなり。三、恐はざる勿れ、強しき空際には涼き風習を感ふるなり。三、強しく懼めよ、また罪を犯す勿れ、それは或る者は神を知らざればなり。われ汝等を誡むしむるために云ふなり。三、五、然るに或る者は罰ならん、死人は如何にして起きざるや、また彼等は如何なる體にて來るやと。三、愚なる者よ、汝が播くもの死なざれば活きず、三、また汝が播くもの「後に」生ふる體を播くにおらず、されど麥にても或ひはその餘のものにても、概なる粒なり。三、六、然るを神はその欲し給ふままに、これに體を與へ給ふ、その種ごとに己が體を與へ給ふ。三、五、すべての肉同肉におらず、或ものは人の肉、また或ものは獸の肉、また或ものは魚の、また或ものは鳥の肉なり。三、四、また天なる體あり、また地なる體あり。されど天なるもの祭光は異なり、また地なるもの「祭光は」異なり。一、一層の祭光は別「なり」、また月の祭光は別「なり」、また星々の祭光は別「なり」、それは星は星よりその祭光にて遠へばなり。三、死人の體もかくの如し、朽つるものにて播かれ、朽ちざるものにて起され、三、腹にて播かれ、祭光にて起され、弱にて播かれ、力にて起され、三、血氣の體にて播かれ、靈なる體にて起さるなり。血氣の體あり、また靈なる體あり。三、五、かくの如く初のアダムは生ける魂となり、終のアダムは活かす靈と「なれり」と覺されたり。三、六、されど靈なるもの前にあらず、反つて血氣なるもの「ありて」その後に靈なるもの「あり」。三、七、第一の人は地に於て、土にて成る

もの、第二の人は天につける主なり。凡そすべて土にて成れる者は、かの土にて成れる者の如く、またすべて天なる者は、かの天なる者の如し。凡それば我等土にて成れる者の形を担ふ如く、天なる者の形をも担ふべし。

五〇 されど兄弟よ、われこれを選べん、即ち肉と血は神の國を嗣ぐこと能はず、また朽つるものも朽ちざるものを嗣ぐこと能はず。五二 見よ、われ異義を汝等に云はん、我等すべて眠に就くにはあらず。五三 されど終の喇叭にて我等は総も睡の間に化せられん、是は喇叭鳴らん、かくて死人は朽ちざる者に甦され、我等は化せらるべければなり。五三 是は必ずこの朽つる者、朽ちざるものを甦、またこの死ぬる者、死なざるものを甦するべからざればなり。五四 されど此の朽つる者、朽ちざるものを甦、また此の死ぬる者、死なざるものを甦んとき、そのとき、死は勝に呑み盡されたり、と欲されたる言は應ふべし。五五 死よ、汝の刺は何處にあるや。陸府よ、汝の勝は何處にあるや。五六 されど死の刺は罪なり、また罪の力は捉なり。五七 されど我等の主イエスキリストによりて、我等に勝を興へ給ふ神に謝しまつ。五八 されば震せらるる我が兄弟よ、汝等の勞の主に在りて空しからざるを知らば、恒に勵みて主の行を勤めつつ確平とせよ、搖かざる者となれ。

第十六章

聖徒等のためにする喜捨に就きてはガラテヤの諸集會に我が指圖せし如く、汝等もその如くせよ。三週の前日に預ひて、汝等おのづかの所得とる

は簡ひ、貯て已が許に置け。これ我が判らんとし、そのとき喜捨することなかりんためたり。三 かくて我が判らんとし、誰にても汝等の處とする者に弊狀を添へ、汝等の患を堪へてこれをエルサレムに運ばさん。四 されど我も宜しく行くべきものならば、彼等は我と共に往くべし。五 我アテニヤを通りて往かんとき、汝等の許に到るべし、是は我アテニヤを通らんとすればなり。六 かくて汝等の許に還まることもあらん、或ひは冬纏することもあらん、是れ汝等の何處にても我が往かんとする所に、我を送らんとせん。七 是はわれ今送すから汝等を見んことを欲せず、主もし許し給はば、暫時汝等の許に還まらんことを望めばなり。八 さればベシテニスまで、われエペソに還まるべし。九 是は又なる且つ働をなすの門、我のために開かれ、また還らふ者も多ければなり。

一〇 またテモテもし到らば、懼なく汝等と偕にあらんために觀ん、是は我が如くに彼は主の行を行へばなり。二 是の故に誰も彼を懼んずる勿れ、且つ彼の平和に我が許に來らんために、これを送るべし、是はわれ兄弟等と共に彼を待てばなり。三 また兄弟のテモテに就きては、われ切に兄弟等と共に、汝等の許に到らんことを彼に勸めたり。されど彼は今朝も心の意、一切らざりき、されど働を得ば到るべし。四 汝等のすべての事、愛をもて處すべし。五 又また兄弟よ、われ汝等に勸む、テニヤの事はテニヤの初難にて、聖徒等に對する樂住

のために、^{たは}己自らを委ねしことは、汝等の知るところなり。一*汝等もかくの如き人々及び我等と共に働き且つ勞するすべての者に服はんことを。一*またわれステパナとポルトナトとアカイコとの到来を喜ぶ、^はそは此等の者は汝等の足りざるところを滿たしたればなり。二*^は彼は彼等は我が靈と、汝等の^は靈とを契にしたればなり。是の故にかくの如き者を認めよ。一*^はアブラハムの諸集會、汝等に挨拶す。アタラとフリスキラはその家に在る集會と同に、主に在りて篤く汝等に挨拶す。二*すべての兄弟等汝等に挨拶す。汝等互に聖き挨拶をもて挨拶せよ。三*われパウロ己が手にての挨拶、三*もし誰ぞ主イエスキリストを懇にせば、彼はアナテヤたるべし。マラツアサ。三*主イエスキリストの使汝等のうちにおれ。四*我が愛、キリストイエスに在る汝等すべての者のうちにおれ。アメン。

ステパナとポルトナトとアカイコとテモテとに托して、ヒリビヨリコリント人に當き賜れ^る節意。

コリント人に贈れる使徒パウロの書状 終り

コリント人に贈れる使徒パウロの書状 第二

第一章

パウロ、神の意によりてイエスキリストの使徒、及び兄弟なるテモテ、書状をコリントに在る神の集會と同に、通くアカヤに在るすべての罪徒等に「應る」。二我等の父なる神及び主イエスキリストより、善と平和と汝等に「おれ」。

三神即ち我等の主イエスキリストの父、慈悲の父即ちすべての慰の神は、配せられます者。四彼は我等のすべての罪のうちにて、我等を慰め給ふ、これ我等自ら神より慰められし處にて、すべての罪のうちにて在る人々を、慰むることを得しめ給はんだためなり。五*そは我等のためにキリストの善の溢るが如く、その如く我等の慰も、キリストによりて溢るればなり。六*されど我等の喜びは憂めるも、汝等の慰と救のためにて、これ我等も受くる同じ苦を耐ふるうちに働くなり。喜びは我等の慰めらるるも、汝等の慰と救のためなり。されば汝等のために拙く我等の望は堅し。七*これ汝等の我等と共に苦に與る者たるが如く、その如く慰にも「共に與る者なる」ことを知ればなり。八*そは兄弟よ、我等アサに於て發りし我等の難に就きて、汝等の知りざるを欲せざればなり。即ち汝だしく厭せられて力耐へ難く、生くることと望なき程なりき。九*されど我等は死の決定を己自らのうちに保ちたり、是れ我等は己自らを顧まず、されど死人

を起し給ふ神を頼まんだめなり。一〇 彼はかく甚だしき死より我等を援ひ給へり、また援ひ給はん、我等は彼も援ひ給はんとの望を彼に置く。一一 汝等も我等のために、祈願をもて相助けたり。是れ多くの類によりて我等に「賜はりし」賜物を、我等のために多くの者に感謝せらるるに至らんためなり。

一二 三 是れ我等の良心の慰、是れ我等の誇たればなり、即ち我等は世に在りて、神の誠實と眞實をもて非肉なる智慧にあらす、されど神の恵をもて非振舞ひ、且つ流るばかり汝等のために振舞ひたり。一三 是れ我等の汝等に書き贈りしは、汝等の憐むところ、或ひは慰むるところより他の神にあらざればなり。一四 されば汝等が部分にて我等を認めし如く、主イエスの日に於て、我等は汝等の、また汝等は我等の誇なることを、終まで汝等の衆かに知らんことをわれ認む。一五 また我は此の確信をもて、汝等の再び恵を得んがために先づ汝等の許に到り、かくて汝等を経てテケトニヤに廻り行き、復びテケトニヤより汝等の許に到り、また汝等よりユダヤに向けて送られんことを企てたり。一七 是の故に此の夜、岸に停きたることをもてせしらんや、或ひは我が企てしところは、我がために然り然りまた否存たらんために、われ胸に懼ひて企てなきんや。一八 また神は信なる者、即ち汝等に對する我等の言は然りまた否とならざるなり。一九 是れ神の子イエスキリスト、我等「我またシエルノまたラモテ」によりて責められ給ひし彼は然りまた否とならす、されど彼に於ては然りとあればなり。二〇 是れ我等

によりて榮光を神に歸しまつらしむるために、何にても神の約束し給ふものは、彼に於ては然りにして、また彼に於てはアメンなればなり。二一 また我等を汝等と共にキリストのうち堅うし、且つ我等に昔を注ぎ給ひし者は嗣なり。二三 また彼は我等に印して、靈の保證を我等の心に與へ給へり。二四 また我等は汝等を祭して、未だコリントに到らざりしなり、と我が魂に神を呼びて證す。二五 我等は汝等の信仰を主らんとするためにあらす、されど汝等の喜の同勞者なり、是れ汝等は信仰をもて立てばなり。

第二章

されば我等は已自らに對してかく決したり、哀をもて復び汝等の許に到らしむるに、ともしわれ汝等を哀しむるならば、我に哀しめられたる者の外に、誰か我を喜ばしむる者あらんや。二三 されば我はかく同じ事を書けり、是れ我は汝等すべてに於て、我が喜は汝等すべての喜なることと確信すれば、我が到りしとき必ず我を喜ばしめざるべからざる者より、反つて哀しめらるることとならんためなり。二四 是れ多くの類と心の憐とより多くの涙をもて、汝等を哀しむるためにあらす、されど我等は汝等のために、流るるばかりに涙を有することを、汝等の知らんために驚きたればなり。二五 されどもし雖も哀しめしならば彼われを哀しめしにあらす、略し實め過ぐるることなからんために非汝等すべてを「哀しめし」なり。二六 かくの如き人のために、多數の者よ

りの此の非難は是れりとす。モされば反つて汝等は「これを」恕し、且つ慰むべし、然らばかくの如き人は、尙ほ勝れる裏に吞み盡されん。入かるが故にわれ汝等に勸む、彼に對して愛を誰にせんことを。カそはわれかく講けるは、汝等のすべての事に委順なるや否や、汝等の睦を知らんためなればなり。一〇されど汝等何事をか恕したる者には、我も「恕さん」。そは我も「何事かを」恕さば、汝等のゆへにキリストの類にて彼を恕しなり。二是れササナに我等の隣せられざらんためなり、そは我等は彼の所存を知らざるにあらざればなり。

三まにわれキリストの福音のために、トロアスに到りしとき、主に在りて我がために自ら聞かれたれど、三我が兄弟なるサトスを見用ださざるために、我が樂に於て易を得ずして、人々に別を告げて「ケドニヤにまで出で來れり。一四されどキリストに在る我等を、恒に勝利に導き給ひ、且つ彼の知識の香を判る處にて、我等によりて顔ならしめ給ふ神に謝しまつる。一五そは我等は救はれたる者のうちにて、また亡ぶる者のうちにて、神に對してキリストの芳しき馨なればなり。一六如何にも或る者には死に至りしむる死の香にして、或る者には生に至らしむる生の香なり」。されば此等の神のために誰か適ふや。一七そは我等は多くの人々の如く、水を加へて神の音を販きつゝあらず、されど眞實なる者の如く、また神につける者の如く、神の面前にてキリストに在りて語られればなり。

第三章 我等は復た自己を顧めんや、もしくは我等は或る者の如く、汝等に對して

腐齋を聖し、或ひは汝等よりこれを「聖する」者ならんや、二汝等は我等の舊服にして、我等の心にて鍍され、すべての人に知られ、また叫まるところなり。三汝等は我等より新へられたるし、キリストの舊服なることは顯はれたり、恐におらず、されど生ける神の榮にて鍍され、石に脚にあらず、されど心の脚脚にて鍍されたり。四また我等はキリストによりて、神に對してかたの如き確信あり。五我等は自己自らとして、何等かの者と勘ふるに、自己自ら適ふ者なりと自らにあらず、されど我等の適ふは神につきてなり。六彼は我等をも新契約の事へ人として適ふ者ならしめ給へり、儀文にあらず、されど靈のなり。そは儀文は殺せども、靈は活かせばなり。七されどもし石に彫られたる儀文に於ける死の祭事も、榮光を燒ち、燻りつはありながら、その榮光のゆへにイスマエルの子等が、モサゼの類を祀はむること能はざりし程ならば、八如何にして靈の祭事は、更に勝れる榮光ありざらんや。九そは罪に定むる祭事もし榮光あるは、義の祭事は尙ほ尙ほ榮光に溢るればなり。一〇そは榮光ありとせられたるものも、更に焼れたる榮光のために「即ち」そのために榮光なきものとなりたればなり。一一そは燒るべきものも榮光をもてありしならば、存ふるものは尙ほ尙ほ榮光のうちにあればなり。一二是の故に我等はかくの如き望を有すれば、益々大膽なることを得るなり。一三またモサゼが燒るべき者の終を、イスマエルの子等の類「燃むることなからん」ために、己自らの類に「面類」を掛けし如きにもらず。一四されど彼等の所存は頭にてせられたり、そは今日に至るまで彼等、舊契約を「解む」とす。

同じ面殻は脱がれずに存すればなり、是れキリストに於て燦るべきものなり。一五 今信に至るまでモラを讀むべき、彼等の心の上には面殻(何ほ)置かるなり。一六 されど主に歸するに至らば、その面殻除かるべし。一七 即ち、主は鏡におはせば、主の靈のおはすところには自由あり。一八 されば我等はみな面殻を脱ぎ、主の榮光を鏡に映し看て、主の靈により、榮光より榮光に、その同じ形に化せらるるなり。

第四章

此のゆへに我等堅を蒙りて此の榮事を得たれば、落膽せず、二反つて耻づべき隠れたる事を棄て、惡しき巧に歩まず、神の言を隠らず、されど眞理を顯はるならば、七ぶる人に對して辯はるなり。一 彼等に於て此の世の神は、その不信仰の所存を首にして、神の形なるキリストの榮光の福音の光を照らさざらしむるに至りたり。二 是れ我等はイエスのゆへに、汝等の奴僕なることを(宜ど)ればなり。三 是れは光に、闇より輝き出でよ、と曰ひし神、彼はイエスキリストの額にある、神の榮光(を知る)の知識の光のために、我等の心のうちに輝き給ひたればなり。

モ されど我等は此の寶を土の器のうちに有つたり、これ掩れたる力は神のものにして、我等のものにあらずらんだめなり。八 我等到る所にて困を受けたれど窮せず、隠蔽つきたれども望

を失はず、九 迫害せられたれども見捨てられず、倒されたれども立てず、一〇 恒にキリストの死を體にて擔ひ廻るなり。是れイエスの生、我等の體に顯はさるためなり。一一 是れ生ける者なる我等は、常にイエスのゆへに死に付さるればなり。是れイエスの生、我等の死ぬべき身に於て顯はさるためなり。一二 されば死は我等のうちを擲き、生は汝等のうちに(働)くなり。一三 されば我は信ぜり、かゝるが故に語されり、と練されたるが如く、同じ信仰の築かれば我等も信ず、かゝるが故に語するなり。一四 是れ主イエスを起し給ひし者は、我等をもイエスによりて起し給ひ、且つ汝等と共に立たしめ給ふべきことを知ればなり。一五 是れすべての生は汝等のゆへなればなり、是れ生は汝等の増し加へられ、多くの人によりて神の榮光となるに至るまで、感謝に溢れしめんためなり。

第五章

一六 かるが故に我等は落膽せず、假令我等の外なる人は強るとも、内なる(人)は日にまた日に新なり。一七 是れ我等の(愛くる)輕き鞭の束の間は、我等のために傷れに候れたる、重き榮光の永を離せばなり。一八 我等の望みるところは視し物にあらず、されど視せりし物なり。是れ視し物は暫時なれども、視せりし物は永なればなり。

是れもし我等の幕屋なる地上の家は壞るとも、神の(賜ふ)建物、手にて造らざる永の家、天に在ることを我等知ればなり。二 是れ我等はこのうちにありて、天より(賜ふ)我等の住居をもて辨せられんことを、戀ひ慕ひつゝ歎くなり。三

し落せられたば、裸に見出されることなるべし。四 是は我等この遊座のちよにある者は、重を負ひて旅けはなり。既がせらるることを欲するにあらず、されど着せらるるをも「欲して」なり、是れ生に死ぬべきもの、吞み盡されんためなり。五 されど此の事を我等に偽し送げしめ給ふ者は神なり、また彼は我等に靈の保證を興へ給へり。六 是の故に恒に勇まし、されど靈のうちに住むときは、主より離れ居ることを知る。七 是は我等は信仰によりて歩み、見ゆるところによらざればなり。八 されば勇まし、且つ反つて悔ふところは離れ、主の許に住まんことなり。

九 かるが故に我等の譽とするところは、或ひは家に住む、或ひは家を離るも、彼に凝せらる者たらんことなり。一〇 是は我等はみな、善にもあれ惡にもあれ、おのおの偽ししところに預ひ、體により「偽しし」ところのものを要するために、必ずキリストの裁き座の前に顯はれざるべからざればなり。一一 是の故に主の畏るべきを知らば、我等人々に説き勸む、されど我等は神に顯になれり、さればわれ汝等の良心にも顯になりたることを望む。二 我等は復ひ己自らを汝等に應むるにあらず、されど我等のために誇の機を汝等に興ふるなり、是れ心にてにあらず、顯にて誇る人々に對して「誇の機を」汝等の有たんだめなり。三 是は我等もし心証は神のため、もし體なる心ならば汝等のためたればなり。四 是は我等かく斷ずるとき、キリストの愛我等を止む能はざらむればなり、五 勸る、もし「人」すての

者に代りて死に給ひしならば、すての者死にたるなり、且つ彼はすての者に代りて死に給へり、是れ生くる人々のも己自らのためにあらず、されど彼等に代りて死に給ひし彼のために生くべきためなりと。六 されば我等は今より肉に預ひて誰をも知るまじ。假令我等は肉に預ひてキリストを知りたりとも、今はもはや「かくは彼を」知るまじ。七 されば誰かもキリストに在らば、新しき創造なり。舊きものは過ぎ去れり、見よ、すてのもの新しくなれり。八 さればすてのものは神のものなり、彼はイエスキリストによりて我等を己自らに和がしめ給ひ、且つ刑の事を我等に興へ給ひたり。九 即ち、神はキリストに在りて世を己自らに和がしめ給ひ、彼等のためにその曲事を赦へ給はす、且つ刑の言を我等に奏し給へり。一〇 是の故に我等はキリストに代りて使節たり。我等によりて神の勸め給ふが如し、我等キリストに作りて願ふ、神に和げよ。三 是は罪を知り給はざる者を、我等に代りて彼は罪となし給ひたればなり、是れ我等の彼に在りて神の義とならんためなり。

第六卷

されば神と同じに働きつ、われらも汝等が神の事を強しく愛くことなるんことを勸む。三 是は惡の期にわれ汝に聞き、また赦の日に汝を助けたり、と彼云ひ給へばなり、見よ、今は惡の期「なり」、見よ、今は赦の日なり。四 我等は「此の事を」罪を許らることなかりんために、何事に於ても人に讓を興へず。五 されどすての事に於て、神の争へんとして己自りを護むるなり、即ち多くの爾へ惡にも、讓にも、乏にも、困にも、

打たるにも、燃ゆるにも、焚するにも、金を斷つるにも、神の
 事へ人として己自らを懸むるなり。六また謙をもて、知識をもて、親切をも
 て、聖靈をもて、儉なきを愛をもて、七眞理の言をもて、神の力をもて、(また)左右にある義
 の武器によりて、八榮と辱とによりて、惡しき噂と善き噂とによりて、人を惑はす者の
 如くにして眞、九知られざる者の如くにして善かに知られたる者、死ぬる者の如くにして、見
 え、我等は生(醒め)る者の如くにして殺されず、一〇哀深き者の如くはなれども常に喜び、
 貧しき者の如くはなれども多くの者を富まし、何をも有たざるが如くにしてすべての物を有す。
 二コリント人よ、我等の口は汝等のために開かれたり、我等の心は廣くなれり。二三汝等
 は我等に欺められたしにあらす、されど汝等の情に狭められたるなり。ニさればわが兄弟等に對
 する如くに云はん、同じき報を(なせ)。汝等も心を廣くせよ。一四不信者と僮に擲はば鞭を負
 ふ勿れ、義と不法と何の共に差ることあらんや、また光と暗と何の親しき交あらんや。一五
 またキリストとペリヤルと何の諧音あらんや、或は僮者と不信者と何の俦あらんや、一六また
 神の聖所と偶像との何の一致あらんや。汝等は生ける神の聖所なり、われ汝等のうちに住み、
 また歩まん、かくて我は彼等の神たるべく、彼等は我の民たるべし、と神の目ひし如し。一七
 主云ひ給ふ、かる亦後に彼等のうちより出て來りて離れよ、且つ不淨に擲る勿れ、さればわれ
 汝等を受け入らん。一八かくて我は汝等のために父としてあらん、また汝等は我のために子ま

第七章 是の故に愛せらるる者よ、我等かかる約束を有すれば、内と靈のすべての汚

より己自らを淨め、神の畏をもて畏を空すべし。
 一我等を愛すよ、我等は誰にも不義をなしことなく、誰をも欺りことなく、誰をも瞞し
 しことなし。三我は罪に定むるために云ふにあらす、そはわれ擧め汝等は何に死し、共に生く
 べく、我等の心のうちにあり、と罰ひたればなり。四我は汝等に對ひて大だ大膽なり、また汝
 等のために語ることも大なり。我は靈にて滿たされ、我等のすべての靈のうちを以て溢るな
 り。五そは我等がペニヤに到りしとき、我等の肉少しも恥を得ず、反つて様々の難に遭ひ、
 外には争、内には懼ありたればなり。六されど惡に沈むる者を慰め給ふ彼、神はトムの到來
 にて我等を慰め給へり。七また幸に彼の到來にてのみならず、彼は汝等の喜ぶこと、また汝等
 の喜ぶこと、また汝等の我等に向ふ熱心をは我等に知らしめつ、彼の汝等に就きて慰められ
 たる慰をもて、我等を慰めしめ給へり、さればわれ益々喜べり。八そはわれ舊狀をもて汝等を
 哀しめしめしを悔ひたれど(今は)悔ひざればなり。そはかの舊狀の汝等を哀しめしめしは、
 一と時なるを視たればなり。九今われは喜ぶ、汝等を哀しめしめしが故にあらす、されど汝等
 は哀しみて悔ひ汝に至りたるが故なり。そは汝等は我等より少しも損を蒙らざるや、神に循
 ひて哀しみたればなり。一〇そは神に循ふは、働きて悔なきの故に至る能ひ改となり、世の哀

は働きて死となればなり。一且よ同じく汝等の、神に預ひて哀しむことは、汝等のうちに働きて、如何ばかりの勤勉、また辨明、また腹立、また懼、また慕、また熱心、また罪を賣却る心となりしや。汝等はすべて此の事に於て、己自ら潔き者たることを表はせり。二されば假令わ汝等に驚き驚りしども、不義を爲し者のためにもあらず、また不義を受けし者のためにもあらず汝等が神の面前にて、我等のために存つところの、汝等の勤勉の類はざるためなりしなり。三此のゆへに我等は汝等の慰にて慰められ、且つテトスの喜にて益々喜べり。そは彼の靈は汝等すべてより更にせられたればなり。四そは假令わ汝等につきて彼に何事を書りしども、耻を受くることなし、反つてすべての事を眞理をもて汝等に語たりし如く、その如くテトスに「語たりし」ところの、我等の許も眞理となりたればなり。五且つ彼の憐の情は、汝等すべての者の願ふこと、(即ち)如何に懼と懐をもて、汝等は彼を受けしかを憶ひ出でつ、皆々汝等に向つて燃るばかりなり。六我は汝等のうちにすべての事に勇まし

くあることを喜ぶ。

第八章

されど兄弟よ、我等テトスの諸賢賢に與へられたる神の恵を汝等に知らしめん、三即ち、靈の多くの驗のうちにて汝等の萃は潔れ、また汝等の貧の底より、その存なく施すの富に溢れたり。四そは彼等は切に乞ふて、聖徒等のためにその奉事との親しき交を我等に願ひつ、自力に預ひ、われ禮す、反つてその力に過ぎてこ

れをいすを自ら好としたればなり。五かくて我等の望みし如くにあらず、反つて彼等は先づ己自らを主に傾け、また神の意によりて、我等に與へたり。六これがために我等はテトスを勸めたり、是れ彼が前に始めたる如く、その如く汝等のうちにても此の恵を完うせんためなりしなり。七されど汝等はすべての事(即ち)信仰に、また言に、また知識に、またすべての勤勉に、また我等に對する汝等の愛に類なる如く、此の恵にも汝等の類なるべきなり。八われ命ずるために云ふにあらず、されど他の人々の勤勉によりて汝等の愛の眞實を驗さんとてなり。九そは汝等は我等のテトスにキリストの恵を知ればなり、即ち、彼は宿める者にておはしたれど、汝等のゆへに貧しくなり給へり、是れ彼の貧をもて汝等の富まさるためなり。一〇またわれこれに就きて見解を興へん、そは唯この行のみならず、尙ほ此の志を少年前に始めしところの汝等のために益なればなり。一されば今その行を完うせよ、汝等が志の切なる望に預ひて、その如くその有つところよりこれを完うせよ。三そは人もし切なる望あらず、その有たざるところによりず、その有つところに上り盡納せらるればなり。三是れ他を鼻くして、汝等を覆ましめんにあらず、されど均しくせんとなり、今の期に於て汝等の餘れるところは、汝等の足らざるを(補ひ)、四また汝等の餘れるところも、汝等の足らざることをためとならんためなり。かくて均しくたるべし。五儼して、集めて、多き者も餘あらず、また少なき者も乏しからざりき、とあるが如し。

「打たるにも、鞭打にも、檻籠にも、勞するにも、目を覺ましるるにも、金を購ふにも、神の事へ人として己自らを處するなり。また謙をもて、知識をもて、撓まざるをもて、親切をもて、聖靈をもて、偽なき愛をもて、眞理の言をもて、神の力をもち、また左右にある義の武器によりて、人祭と辱によりて、惡しき噂と善き噂とによりて、人を惑はす者の如くにして眞ん知られざる者の如くにして、恥かに知られたる者、死ぬる者の如くにして、見よ、我等は生かざらるる者の如くにして殺されず、一〇 哀深き者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの者を富まし、何をも有たざるが如くにしてすべての物を有す。

一 コリント人ト、我等の口は汝等のために開かれたり、我等の心は廣くなれり。三 汝等は我等に狹められしにあらす、されど汝等の情に狹められたるなり。三 さればわれ我等に對する如くに云はん、同じき報をなせ。汝等も心を廣くせよ。四 不信者と偕に轡は汝等を負ふ勿れ、義と不法との共に穿くことあらんや、また光と暗との親しき交あらんや。五 またキリストとペリルと何の諧言あらんや、或は信者と不信者と何の保あらんや、六 また神の聖所と偶像との何の一致あらんや。汝等は生ける神の聖所なり、われ彼等のうちに住み、また歩まん、かくて我は彼等の神たるべく、彼等は我の民たるべし、と神の目ひしが如し。七 去去ひ給ふ、かるが故に彼等のうちより出で來りて離れよ、且つ不潔に罰る勿れ、さればわれ汝等を受け入れん。八 かくて我は汝等のために父としてあらん、また汝等は我のために子ま

た娘としてあるべし、全能の主云ひ給ふ。

第七章

是の故に愛せらるる者よ、我等かゝる約束を有すれば、肉と靈のすべての物より己自らを清め、神の畏をもて聖を究むべし。

一 我等を受けよ、我等は誰にも不義をなしことなく、誰をも欺りしことなく、誰をも騙し

しことなし。三 我は罪に宛むるために云ふにあらす、そはわれ衆め汝等は共に死し、共に生くべく、我等の心のうちにあり、と謂ひたればなり。四 我は汝等に對ひて大だ大膽なり、また汝等のために誇ること大なり。我は腹にて満さまれ、我等のすべての靈のうちに喜にて溢るなり。五 我等は我等がキリストに到りしとき、我等の肉少しも虧を得ず、戻つて幾々の難に遭ひ、外には争、内には望ありたればなり。六 されど誰に沈める者を輕め給ふ彼、神はキリストの到來にて我等を慰め給へり。七 また亦に彼の到來にてのみならず、彼は汝等の喜ぶこと、また汝等の望ぶこと、また汝等の我等に向ふ熱心をば我等に知らしめつ、彼の汝等に就きて慰められたる望をもて、我等を慰めしめ給へり。八 さればわれ益々喜べり。九 さればわれ齊衆をもて汝等を哀しましめしを慰むればなり、今我は喜ぶ、汝等を哀しましめしが故にあらす、されど汝等一と時なるを視たればなり、今我は喜ぶ、汝等を哀しましめしが故にあらす、されど汝等は哀しましめて悔ひ改に至りたるが故なり。そは汝等は我等より少しも損を蒙らざるや、神に罰ひて哀しまたればなり。一〇 そは神に罰ふ哀は、働きて悔なきの故に至る悔ひ改となり世の哀

し着せられはば、裸に見出ださるることなるべし。四 是は我等この謙遜のうちにあり、
 ば、重を負ひて歩けばなり。隙がせらるることを欲するにあらす、されど猶せらるることを
 を「欲して」なり、是れ生に死ぬべきもの、容み難きれんためなり。五 されど此の事を我等
 に爲し遂げしめ給ふ者は剛なり、また彼は我等に靈の保證を與へ給へり。六 是の故に恒に勇ま
 し、されど體のうちに住むときは、主より離れ居ることを知る。七 是は我等は信仰によりて歩
 か、且ゆるところによるざればなり。八 されば勇まし、且つ反つて悦ぶところは機より離れて、
 主の許に住まふことなり。

九 かかるが故に我等の譽とするところは、或ひは家に住むも、或ひは家を離るも、彼に慕ひ
 らる者たらんことなり。一〇 是は我等はみな、善にもあれ惡にもあれ、おのおのその傷し
 ところを覆ひ、機により「爲し」ところのものを受くるために、必ずキリストの裁き座の前
 に顯はれざるべからざればなり。一一 是の故に主の畏るべきを知らば、我等人々に鼓を動ひ、
 されど我等は神に顯になれり、さればわが汝等の良心にも機になりたらんことを望む。三 我
 等は復び自らを汝等に屬するにあらす、されど我等のために誇の機を汝等に與ふるなり、是
 れ心にてあらす、顯にて誇る人々に對して「誇の機を」汝等の病たためなり。三 是は我
 等もし心証はば神のため、もし體なる心ならば汝等のためなればなり。四 是は我等かへ斷
 ずるとき、キリストの靈我等を止む能はざらしむればなり、五 即ち、もし「人」すべの

第六章

者に代りて死に給ひしならば、すべての者死にたるなり、且つ彼はすべての者に代りて死に給
 へり、是れ生くる人々のもはや已自らのためにあらず、されど彼等に代りて死に給ひし彼のた
 めに生くべきためなりと。六 されば我等は今より肉に覆ひて誰をも知るまじ。假令我等は
 肉に覆ひてキリストを知りたりとも、今はもはや「かくは彼を」知るまじ。七 されば誰かも
 しキリストに在らば、新しき創造なり。舊きものは過ぎ去れり、見よ、すべてのもの新しくな
 れり。八 さればすべてのものは神のものなり、彼はイエスキリストによりて我等を己自らの
 和がしめ給ひ、且つ刑の事を我等に與へ給ひたり。九 即ち、神はキリストに在りて世を己
 自らに和がしめ給ひ、彼等のためにその曲事を働へ給はず、且つ刑の言を我等に發せ給へり。
 一〇 是の故に我等はキリストに代りて使節たり。我等によりて神の勅め給ふが如し、我等キリ
 ストに代りて願ふ、神に和げよ。一一 是は罪を知り給はざる者を、我等に代りて彼は罪となし
 給ひたればなり、是れ我等の彼に在りて神の義とならんためなり。

一二 されば神と共に働きつゝ、われらも汝等が神の恩を盡しく受くることなから
 んことを勵む。三 是は惡の期にわれ汝に聞き、また汝の日に汝を助けたり、
 七 彼云ひ給へばなり、見よ、今は惡の期「なり、見よ、今は汝の目なり」。四 我等は「此の
 事を罪せらるることなからんために、何事にあらずとも人に讓を與へず。五 されどすべての事に於
 て、神の喜べんとし己自らを辱むるなり、即ち多くの耐へ忍にも、誰にも乏にも、固く

打たるにても、権威にても、亂にも、勞するにても、金を斷つにても、神の事へ人として己自らを應むるなり。六また謙をもて、知識をもて、機きをもて、親切をもて、聖靈をもて、偽なき愛をもて、七眞理の言をもて、神の力をもてし、(また)左右にある義の武器によりて、八榮と辱とによりて、惡しき噂と善き噂とによりて(せり、人を惑はす者の如くにして眞、九知られざる者の如くにして善かに知られたる者、死ぬる者の如くにして、見よ、我等は生(ぞ)かざる者の如くにして殺されず、一〇哀深き者の如くたれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの者を富まし、何をも有たざるが如くにしてすべての物を有す。

一 コリント人よ、我等の口は汝等のために開かれたり、我等の心は廣くなれり。二 汝等は我等に嫉められしにあらす、されど汝等の情に狭められたるなり。三 さればわれ兄弟等に對する如くに云はん、同じき報を(なせ)。汝等も心を廣くせよ。四 不信者と憐に捕ははねば負ふ勿れ、善と不法と何の共に享くることあらんや、また光と暗と何の親しき交あらんや。五 またキリストとペリヤルと何の證書あらんや、或は信者と不信者と何の保あらんや、六 また神の聖所と偶像の何の一致あらんや。汝等は生ける神の聖所なり、われ彼等のうちに住み、また歩まん、かくて我は彼等の神たるべく、彼等は我の民たるべし、と神の自ひしが如し。七 主云ひ給ふ、かゝるが故に彼等のうちより出て來りて離れよ、且つ不靜に押る勿れ、さればわれ汝等を受け入れん。八 かくて我は汝等のために父としてあらん、また汝等は我のために子ま

た奴としてあるべし、全能の主云ひ給ふ。

第七章

一 汝等を受けよ、我等は誰にも不義をなしことなく、誰をも壞りしことなく、誰をも騙ししことなし。二 我は罪に定むるために云ふにあらす、そはわれ猶も汝等は前に死し、前に生くべく、我等の心のうちにあり、と罰ひたればなり。三 我は汝等に對ひて大だ大膽なり、また汝等のために許ること大なり。我は愚にて滿たされ、我等のすべての靈のうちには喜にて溢るるなり。四 我は我等がペトニに到りしとき、我等の肉少しも傷を得ず、反つて様々の難に遭ひ、外には争、内には懼ありたればなり。五 されど誰に比める者を慰め給ふ彼、神は子トスの到來にて我等を慰め給へり。六 また亦に彼の到来にてのみならず、彼は汝等の基ぶこと、また汝等の愛ぶこと、また汝等の我等に向ふ熱心をば我等に知らしめつ、彼の汝等に就きて慰められたる慰をもて、我等を慰めしめ給へり、さればわれ益々喜べり。七 我はわれ舊態をもて汝等を哀しめしめしを悔ひたれど、(今は)悔ひざればなり。そはかの舊態の汝等を哀しめしめば、一と時たるを視たればなり。八 今われは喜ぶ、汝等を哀しめしめしが故にあらす、されど汝等は哀しみて悔ひ汝に至りたるが故なり。そは汝等は我等より少しも損を蒙らざるや、神に循ひて哀しみたればなり。九 そは神に循ふは働きて悔なきの救に至る悔ひ改となり、世の救

は働きて死となればなり。一見よ、同じく汝等の神に預ひて哀しみしことは、汝等のうちに働きて、如何ばかりの勤勉、また辨明、また服立、また懺悔、また謙心、また罪を懺悔する心となりしや。汝等はすべて此の事に於て、己自ら潔き者たることを表はせり。二されば假令われ汝等に書き聞りしとも、不義を爲しし者のためにもあらず、また不義を受けし者のためにもあらず、汝等が神の面前にて、我等のため有つところの、汝等の勤勉の顯はざるためなりしなり。三此のゆへに我等は汝等の慰にて慰められ、且つクリントの事に益々喜べり。そは彼の靈は汝等すべてより爽にせられたればなり。一四 是は假令われ汝等につきて彼に何事なかりしとも、耻を受くることなし、反つてすべての事を眞理をもて汝等に語たりし如く、その如くクリントに「語たりし」ところの、我等の時も眞理となりたればなり。一五 且つ彼の憫の情は、汝等すべての者の願ふごとく、即ち如何に憫と憐れをもて、汝等は彼を受けしかを憐れ出でつ、増々汝等に向つて溢るばかりなり。一六 我は汝等のうちにすべての事に勇まし

第八章

されど兄弟よ、我等アゲトニナの諸集會に與へられたる神の恵を汝等に知らしめん、三即ち、曠の多くの曠のうちにて彼等の喜は溢れ、また彼等の貧の底より、その濟なく極すの富に溢れたり、三そは彼等は切に乞ふて、聖徒等のためにする善と、その善事との親しき愛を我等に願ひつ、四力に預ひ、われ證す、反つてその力に過ぎてこ

れを己なすを自ら好むとしたればなり。五かくて我等の望みし如くにあらず、反つて彼等は先づ己自らを主に懺悔、また神の意によりて、我等に與へたり、六これがために我等はアトスを憫めたり、是れ彼が前に始めたる如く、その如く汝等のうちにても此の恵を空うせんためなりしなり。七されど汝等はすべての事、即ち「信仰に、また言に、また知識に、またすべての勤勉に、また我等に對する汝等の愛に對する如く、此の恵にも汝等の豐なるべきなり。八われ命するために云ふにあらず、されど他の人々の勤勉によりて、汝等の靈の眞實を顯さんとてなり。九そは汝等は我等の主イエスキリストの恵を知ればなり、即ち、彼は貧める者にておはしたれど、汝等のゆへに貧しくなり給へり、是れ彼の貧をもて汝等の富まざるためなり。一〇 またわれこれに就きて見解を與へん、そは唯この行のみならず、尙ほ此の志を青年前に始めしところの汝等のために益なればなり。一一されば今その行を空うせよ、汝等が恐の切なる事に預ひて、その如くその有つところよりこれを空うせよ。一二 是は人もし切なる望あらず、その有つたざるところにより、その有つところにより強納せらるればなり。一三 是れ他を身くして、汝等を鞭ましめんにあらず、されど均しくせんとなり、今の期に於て汝等の餘れるところは、汝等の足らざるを「補ひ」、一四 また彼等の餘れるところも、汝等の足らざることのためとならんためなり。かくて均しくなるべし。一五 終して「集めて」多き者も餘あらず、また少なき者も乏しからざりき」とあるが如し。

一六 されど汝等のためにトロスの心に、同じ勸勉を興へ給ふ神に謝しまつる。一七 是は彼は勸を受けられたり、更に勸勉なる者なれば、自ら進みて汝等の許に出で往きたればなり。一八 また我等は一八人の兄弟を彼と共に遣はせり、彼は福音をもつての集會によりて譽めらるる者なり。一九 それのみならず、彼は主自らの榮光と、汝等の切なる望の「隠人として」我等の事ふところの此の望のために、該集會より指名せられたる我等の路連なり。二〇 「是れ我等の事ふところの此の望のために、該集會より指名せられたる者なからんやう避くるなり。二一 「かくす等の事ふところの此の贈物のために我等を咎むる者なからんやう避くるなり。二二 「また我等はるは主の面前のみならず、尙ほ人の面前にも良き事なり」と強め思ふなり。二三 また我等は二一人汝等の兄弟を彼等と共に遣はせり、我等は屢々多くの罪に於て、彼の勸勉なる者なることを認めたり、且つ「彼は」今汝等を厚く贖情するに由りて、その勸勉益々盛なり。二三 或ひはトロスに就きて「云はんか、彼」は私の親しく交はる者にて、汝等のためには同勞者なり、或ひは我等の兄弟等に就きて云はんか、彼等は「諸集會の使徒にして、キリストの榮光なり。二四 是の故に汝等の愛と、汝等に就きて我が誇りしこととの表を、彼等にまで、即ち諸集會の類にまで表はすべし。

第九章

そは聖徒等に對するの奉事に就き、汝等に書き贈るは我に過ぎたることなればなり。二五 是はわれ汝等の切なる望を知り、汝等に就きて、「アカヤは豫年前に稱せり」とアケフ二十一人に誇りたればなり。かくて汝等の熱心は、多くの人の「熱心」を惹

き起せり。二三 されど我等の、汝等に就きて誇りし此の事の、差しくならざらんために、われ兄弟等を遣はせり。二四 此れ我が云ひし如く、汝等の備へてあらんためなり。二五 もし「アケフ」人の我と共に到りて、汝等の備へざるを見用たさば、汝等は云ふに及ばず、我等も誇り此の確言にて、恐らくは耻を受くるならん。二六 是の故に我は兄弟等を勸めて、先づ汝等にまで往かしめ、豫め置たる汝等の寄捨を、若むか加くせずして喜びて備へ、強めこれを酬へしむるは必要なりと思へり。二七 されどかくの如し、乏しく播く者は獲るも乏しく、また箱に播く者は箱に獲るべし。二八 主のおのその心に思ふ如くせよ。汝しみてせず、或ひは強ひて爲す勿れ、是は神は快く興ふる者を愛し給へばなり。二九 また神は汝等の、恒にすべの事に於てすべの物を豊に有ちて、すべの善き行に豐ならんため、すべの恵を汝等に豐ならしむることを得給ふなり。三〇 然して、彼は廣く散らし給へり、貧しき者に興へ給へり、その義はいづまでも存せん、とあるが如し。三一 されば播く者に種を給し、また食するのためにパンを俵し給ふ者は、汝等の義の實を將し給ふべし。三二 「汝等はすべの事に當みれば、吝なく施すことを得るに盡れり、されば我等により勵きて神に感謝するに至らん。三三 是は此の奉仕の事は、齊に聖徒等の乏を補ふのみならず、尙ほ多くの者によりても溢るるばかり神に感謝せらるればなり。三四 また彼等は「此の奉仕の證明によりて、キリストの福音に對して、汝等の告白せる服従と、彼等に對し、またすべの者に對して「汝等の」親しき父の音なきとのために、榮光を神に歸し、二

且つ汝等に賜はりし神の働いたる業のゆへに、汝等を戀ひ慕ひつゝ、汝等のために祈願すればなり。三 五 さればかく言ひ盡したがたきその賜物のために、神に謝しまつた。

第十章

またバカロ、われ汝等のうちにては、顔に覆ひては如何にも卑しく、されど離れ居りては、汝等に對して勇ましき者、自らキリストの柔和と寛容をも

て汝等に勵む。三 されどわれ顔ふ、我等を肉に覆ひて歩む如く糊ふる者に對しては、われ必ず勇敢にせんと勵ふところの確信をもて、我の居合はずときに勇ましからざらんことを。三 四 我等は肉に在りて歩めども、肉に覆ひて戦はざればなり。四 我等の戰の武器は肉なるも

の知識に逆らひて擧げたるすべての高き物とを纏へし、またすべての所存を擧にして、キリストに服はしむ。六 且つ汝等の服を成就したるとき、すべての不順に報ゆべき御あり。

七 汝等は顔に覆ひて物を視るか。もし誰か己自らをキリストのものたるべく確信せば、彼をしてかく彼がキリストのものなるが如く、その如く我等もキリストのものなり、と復た糊へし

めよ。八 是は假令主が汝等を覆へすためにありして、建つるために我等に與へ給ひし我等の權に就きて、尙ほ勝りて多少誇るとも、耻を受くべきにあらす。九 是れ我は靈狀によりて、汝

等を擧ずが如く思はせざらんためなり。一〇 是は靈狀は如何にも重々しく且つ強し、されど靈の到来は弱く、言は取るに足らず、と彼述ぶればなり。二 かくの如き者は我等が居合はずと

きには行に於ても、離れ居りて靈狀によりて、言に於てあるが如き者なり、とかく糊ふべし。三 是は我等は取て己自らを應むる人々と己を並べ、或ひは較ぶることをせず、されど彼等

は己自らをもて己自らを擧り、また己自らを己自らに較べて懼らざればなり。三 また我等は

罪を越したる事のために誇らず、されど神が我等に顔ち給ひし、汝等にまでも及べる典の原に

覆ふなり。一 四 是は我等は汝等にまで及ばざる者の如くに己自らを越えて己自らを延ばさざればなり。五 我等は敢て

たる事のために、他人の勞をもて誇るにあらす、されど汝等の信仰の、我等の典に覆ひて彌増

さり、汝等のうちに増々大にならんことを望みてなり。六 他人の典をもて既に備はりたる事のために誇るにあらす、

る者は主に在りて誇るべし。八 是は是とせらるる者、彼は己自らを應むる者にあらす、されど神の認め給ふ者なればなり。

第十一章

望むらくは汝等少く我が愚を堪へ忍ばんことを、されど如何にも汝等は我を堪へ忍ぶ。二 是は我は神の熱心をもて汝等を熱心すればなり。三 是は我キ

リストに載げんとて、汝等を誤き處女として、一人の男に運送はしめればなり。三 されど我は蛇がその奸計にてエペを惑はしたる如く、その如く汝等の所存の擧られて、キリスト

に對する誠實より離れんことを懼る。四 是はもし人來りて、我等が重々ざりし別のキリストを

宜くは、或ひは汝等が受けざりし與なる靈を受け、或ひは汝等が受けざりし與なる福音を「受けて」、汝等は良く堪へ忍ぶべければなり。五、是は我は何事にも、かの最優れたる使徒等に劣れりと拘へざればなり。六、されば假令われは言に訓育なき者なれども、知識に於ては然らず。されどすべての事に於てすべての物をもて汝等に類はせり。七、或ひはわれ汝等の高きせられんために、己自らを卑うせしこと即ち、價なしに汝等に福音を宣傳しは、罪を犯したりとなすか。八、我は汝等の奉祭のために、他の諸教會を掠めて給料を取れり。かくてわれ汝等と併に居合はして乏しかりしとき、誰をも損はせざりき。九、是は「クアドニヤ」より來りし兄弟等、我の乏を補ひたればなり、且つすべての事に於て、汝等を異はせしと己自らを隠したり、尙ほ隠らん」とす。一〇、此の語は我がために、アマヤの地方に於て封せられざるべきは、我に在るキリストの眞理なり。一一、何故ぞや。われ汝等を震せざるが故なるか、神知り給ふ。一二、されど我が爲すところのものは、我も憐さん。是れ權を欲する者の權を斷たんため、彼等が訪るところに於て、我等の如くたるを見出ださんためなり。一三、是はかくの如き者は偽の使徒、騙り者なる物き人の、キリストの使徒にその貌を變へたる者なればなり。一四、されど不思議にあらず、そは彼サタナも、光の使徒にその貌を變ふればなり。一五、是の故にたとひその事へ人等が、義の事へ人等の如くその貌を變ふることも、大罪にあらず。彼等の終はその行に楯ふべきなり。

一六、復たわれ云はん、雖も我を愚なる者なりと思ふ勿れ、されどもし然らずば、愚なる者と

して我を受けよ、是れ我も少く何事をか誇らんためなり。一七、我の語るところは主に楯ひて語たるにあらず、されど愚なる者として誇の此の禮儀をもて「語た」るなり。一八、即ち、多くの者肉に楯ひて誇れば、我も辨るべし。九、是は汝等は恰き者にて、喜びて愚なる者を堪へ忍ばばなり。二〇、是は汝等はもし誰か汝等を奴僕たらしむるとも、もし誰か「汝等を」啖ひ盡すとも、もし誰か「汝等と」し取るとも、もし誰か己を高うするとも、もし誰か汝等を斷に於て打つとも、これを堪へ忍べばなり。二一、われ耻ぢて云はん、我等は弱き者の如くなりき。されど人の勇敢なり得るところには、愚なる故にわれ云はん、我も勇敢なり。二二、彼等は「ア」ル人なるか、我も「然り」。彼等は「イ」ラエル人なるか、我も「然り」。彼等は「ア」ラハムの種なるか、我も「然り」。二二、彼等はキリストの事へ人なるか、狂へる者としてわれ語たらん、我は勝れり。勞に於て尙ほ勝り、管に於て數更に多く、權者に入れらるること尙ほ多く、死に「陥」ること塵々なりき。二三、我は「ユ」ダヤ人より五つたび四十に一つ足らぬ權を受け、五、三たび條にて打たれ、一たびは右たれたり。我は三たび破船にあひ、一晝夜深處にて過ぐしたり。二四、〔また〕旅路にあること塵々にて、河の難、強盜の難〔已が〕旗よりの難、國人よりの難、市にての難、荒野にての難海上の難、他の兄弟等の難に「遭へり」。二五、〔且つ〕勞と辛苦に、しばしば目を感ましむること、飢と渴に、屢々食を嗜つことに、寒と裸とに「遭へり」。二六、尙ほ此處に省きたる多くの事の外に、日に楯ひて我に押し迫ることあり、すべての教會の心違

なり。五、誰を弱りて、われ弱らざらんや、誰ぞ躓きて、われ燃えざらんや。三〇、もし必ず誇らざらんば、我は我が弱きことを誇るべし。三、神即ち我等の主イエスキリストの父は、我の弱らざるを知り給ふ。彼は未だに至るまで、視せられ給ふ者におはします。三、ダマスコにてアレクサ王の町長、我を捕へんと欲してダマスコの市を衝りつゝありき。三、さればわれ慾より離れて、石垣にそびて廻り下られ、彼の手を脱したり。

第十二章

游ることはかに我に益あるにあらざ、是はわれ主の異象と黙示とに來るべければなり。三、われキリストに在る「或る」人を知る、「正に」十四年前たりき、件の人を第三の天にまで奪ひ去れり。或ひは體に在りてか、われ知らず。或ひは體を離れてか、われ知らず。神知り給ふ。三、またわれ件の人を知る、或ひは體に在りてか、或ひは體を離れてか、われ知らず。神知り給ふ。四、即ち彼はバラダイスにまで奪ひ去られたり、且つ人に語らることを許されざる言ひ御詞を開けり。五、我はかくの如き者のために誇らん。されどわれ自らのために、我が弱きことの外は誇らざるべし。六、是は我もし誇らんと欲するとも、我は愚なる者たらざるべければなり、是は眞理を我は語ふべければなり。されど我は、誰ぞ我に就きてその視るところ、或ひは聞くところに過ぎて謝ふることなからんために、「誇ることを」認めん。

り、これ我が高ぶることなからんために、我を撃つサカナの健なり。八、われこれがために、三たび主に我よりその睡れんことを乞へり。九、然るに彼われに謂ひ給へり、我が患は汝に足れり、是は我が力は弱に於て完うせらるればなり。是の故にわれはキリストの力の、天幕の如くに我を蔽はんために、我は擊る欣びて我の弱に誇らん。一〇、かるが故に我はキリストのために、弱のうちに、辱のうちに、乏のうちに、貧のうちに、困のうちに憐はん、是は我は弱きとき、そのとき強ければなり。一、汝等われを強ひたれば、誇りて我は愚なる者となれり。是は我は汝等に應らるべき言なればなり、是は假令われは無一物なりとも、最優れたる使徒等に少しも劣らざればなり。

二、「我が使徒たるの徴は、すべての耐へ私を以て汝等のうちに働きて、微と痕跡と力ある行とにてなされたり。三、汝等はわれ自ら汝等を果はせざりしことの外、餘所の集會より何の食けたる事あるや。此の不義を我に恕せ。四、且よ、三たびめわれ汝等の許に到らんと用意せり、されど汝等を果はせざるべし、是は我は汝等を「衆むるの」外、汝等の物を索めざればなり。されど汝等は双親のために貯ふべき管にあらす、されど双親は兒のために「貯ふべき管」なればなり。五、されば假令われ汝等を溢るばかりに愛すれば、愈々少くわれは愛せらるるとも、欣びて汝等の魂のために財を費さん、また身を費し難さん。六、されば「人の云ふ如く」さもあらん、我は汝等を果はせざりき、されど巧なる者なれば、騙をもてわれ汝等を捉へたり。七、

されど汝等の許に便はし者の誰によりて、われ汝等を罰かしや。八 われテトスを勧め、また彼と同一兄弟を使はせり。テトスは何ぞ汝等を罰かしや、我等は同じ靈にて歩まざりしや、同じ足跡をもてせざりしや。

九 復た我等は汝等に對して辨明するなりと汝等思ふや。キリストに在りて神の面前にて証したる、愛せらるる者よ、すべては汝等の徳を建つるためなり。一〇 そはわれ或ひは我の到りたるとき、我の欲せし如くに汝等を見出ださず、我も汝等の欲せし如くに見出だされず、或ひは詩、妬、讒、謔、讒言、傲、亂などのあらんことを懼るればなり。三 然らずばわれ復た到りたるとき、我が神は汝等のために我を懼しめ給ひ、且つ前に罪を犯したる多くの者のその犯したる不潔、また淫行、また好色を懼ひ改めざるを惡ましめ給ふべきことを「懼る」

第十三章

此の三たびめわれ汝等の許に來らんとす。二三 護人の口にて、すべての事は確く定めらるべし。二 われ前に誦ひたれど、二たびめに居合はししときの如く、今離れ居りて、前に罪を犯したる人々と、その條のすべての者とに煉め云はん、即ち、われもし到らば、復た發さじ。三 これ汝等は、我に在りて語たり給ふキリストの證明を素むればなり。彼は汝等に向ひて弱からず、汝等のうちにおはして強し。四 是は彼は弱をもて十字架につけられ給ひたれど、神の力にて坐き給へばなり。そは我等も彼に在りて弱けれども、汝等に向ふ神の力にて、彼と同一に生くべければなり。五 汝等己自ら信仰に在るや否や己自らを試み、

己自らを驗せ。或ひは汝等はイエスキリストの、汝等のうちにおはすことを己自ら認めざるか、もし汝等は棄てられたる者ならずば、六 されど我等は棄てられたる者にあらざることを、汝等の知らんことをわれ望む。七 さればわれ汝等の少しにても、惡を爲さざらんことを神に祈る。これ我等最とせられたる者の顯はれんためにあらず、我等は棄てられたる者の如くあるとも、汝等の良きことを爲さんためなり。八 是は我等眞理に遵らひては少しも力あらず、眞理のため「力」あればなり。九 是は我等弱くとも、汝等の強きときは、我等これを喜べばなり。されば我等も汝等のかく全くならんことを祈るなり。一〇 此のゆへに主が覆へすためにあらずして、建つるために我に興へ給ひし權に拒ひて、居合はずときにわれ嚴しく「汝等を」待ふことなからんために、離れ居りて此等の事を許けり。
一 一の候、兄弟よ、喜べ、企かれ、慰められよ、同じ心なれ、平和なれ。されば愛と平和の脚は汝等のうちにおはさん。二 聖き接吻をもて互に挨拶せよ。すべての聖徒等汝等に挨拶す。三 主イエスキリストの恵と、神の愛と、聖靈の親しき交と、汝等すべてのうち「おはれ。アメン」

テトスとルカとに托して、アケトニヤのどりよりコリント人に書き贈れる第二。

ガラテヤ人に贈れる使徒パウロの書狀

第一章 バウロ、人々よりにおらず、また人によりてもあらず、されどイエスキリスト、彼を死人のうちより起し給ひし父なる神とによりての使徒、ニ及び我に作ふすべての兄弟等〔書狀を〕ガラテヤの諸集會に贈る。三父なる神及び我等の主イエスキリストより神と平和と汝等にあれ。四彼は神即ち我等の父の意に指ひて、現在の惡しき世より我等を撥き出だし給はんとして、我等の罪のために己自らを與へ給へり。五世々の世々に至るまで榮光彼におれ。アメン。

*我は汝等のかく速にキリストの遊のうちに汝等を召したる者より離れて、他の福音に移りつあることを怪しむ。七此は別のものにあらず、或る人々の汝等を撥き亂すにあらずば、キリストの福音を曲げんと欲するなり。八されど我等にもせず、或ひは天よりの使にもせず、我等が汝等に宣傳しし福音に戻れる福音を宣傳せば、彼はアテたるべし。九我等前に謂ひし如く、現に復たこれ云はん、もし誰にても汝等が受けしところに戻れる福音を汝等に宣傳せば、彼はアテたるべし。一〇現に我は人の親しみを得んとするや、或ひは神の親しみを得んとするや、或ひは人に喜ばるることを樂むるや、もしわれ尙ほ人に喜ばれておし

コリント人に贈れる使徒パウロの書狀 終り

ならば、我はキリストの奴隷にはあらざるべきなり。

二兄弟よ、われ汝等に知らしめん、我等より宣稱せられたる福音は、人に預ひてはあざむき

ることを。三それはわれこれを人より受けず、また教へられず、イエスキリストの啓示によりて

得られたばなり。三それは汝等は我が曾てユダヤ教に在りしときの我が振舞を聞けばなり、

即ち神の集會を甚しく消滅し、且つこれを流せり。二且つ我は我が先祖等の言ひ傳へ、勝

りて熱心なりしかば、我が族のうち同し年輩の多くの者に勝りて、ユダヤ教に進みてありき。

二五されど我が母の助より我を別ち、且つその徳によりて召し給ひし神は、一國人のうち

に福音のその子を宣傳せしむるために、我のうちを啓示し給ふことを憫とし給ひしとき、我

は直に肉と血とに離らず、一またエロコルマに上りて、我より以前に使徒たりし人々の許に

も往かず、されどアラビヤに去り、後ち復たダマスコに歸りたり。二一それはより三年の後、

テコロを尋ねんとてエロコルマに上りたり。かくて彼の許に十五日居りたり。二五されど我は主の

兄弟なるサウロを除きては、他の使徒等を見ざりき。三されば我が汝等に誓ふことは、

見よ、神の面前に我は偽らざるを。三その後、我はシリアとキリキヤの地方とに到りしが、

三スキリストに在るユダヤの諸集會には我が親を知られざりき。三されど唯彼等は、曾て我

等を迫害せし彼が、今その曾て荒せしところの福音を信仰を宣傳ふ、と聞きつつありしのみ。

三かくて彼等は我に於て神を頌めまつりつつありき。

第二章 その後「正に十四年を續て、復た我はバルナバと共に、テトロをも作り
エロコルマに上りたり。三されど我は巖窟に宿ひて止るなり、されば國人
のうち我が宣へしところの福音を彼等に傳へ、また名ある人々にも人を連れて「陳べたり。
これ我は堅く走ることなからんため、或ひは兎りしこと「なからんため」なり。三されど我
に伴ひしテトロはキリスト人なるに、御禮せらるべく服ひられざりき。四即ち當に入りし處の
兄弟等のゆへなり。彼等はキリストイエスに在りて我等が有する自由を窺ひ、我等を憐れたら
しめんとて憐に入り來りしなり。五我等は福音の眞理の、汝等と併に恒に存せんために、彼等
に一時も屈して服ふことをせざりき。六されど或るものたるべく思はる人々より、彼等は
如何なる者なりしにもせず、我に取りては少しも異なるどころなし。神は人の親を振り給はず、
そはかの名ある人々、何を我に加へたることなく、せ反つて我の無窮の福音を委ねられし
こと、ベテロが劉禮の「福音を委ねられしが」如きを見ればなり。八それは劉禮の使徒の職の
ためにベテロのうちにも働き給ひし者は、國人のために我のうちにも働き給ひたればなり。九且
つ我に與へ給ひし事を知りて、テコロまたバルナバまたヨハネ、柱と思はる此等の人々は、我
とバルナバとに親しき交の右の手を與へたり。これ我等は國人に「住き」、彼等は劉禮の者に
往くべきためなり。一〇唯彼等の願ふところは「住しき者」を我等の境ひ出でんことのみ「な
りき」此の事は我等も感さんとて驚みしところなり。二されどベテロのアナクテに來りし

とき、彼は待らるべきことあり、故に我は頭に俯ひて彼に遊らひたり。三、それは或る者の手
 コテより来りし以前には、國人のうちに同に在しつゝありしが、彼等の到りしとき、刺殺の
 人々を懼れ、彼は退きて己自らを區別したればなり。三且つその僞のユダヤ人も、彼と同に
 能はりたれば、バルナババルナバ（彼等の僞に連れ往かれたり。一四）されど我は彼等が福音の眞理に
 對して、眞直に歩まざることを見しとき、すべての者の前にてペテロにいへり、汝もユダヤ
 人たるに、異邦人らしくしてユダヤ人らしく生きずば、何故に國人をば、強ひてユダヤ化せし
 めんとするや。一五我等は生まれながらのユダヤ人にして、國人より罪人に非らず。一六さ
 れど人はイエスキリストの信仰によりてあらざれば、掟の行にて義とせられざることを知
 り、我等もキリストイエスを信じたり。是れ掟の行にてあらざらず、キリストの信仰にて我等の
 義とせらるためなり、そはすべての肉は掟の行にて義とせられざるが故なり。一七されども
 しキリストに在りて義とせられんことを求めつゝ、我等は己も罪人なることを見出たし
 らば、キリストは罪の事へ人なるか。有るまじきことなり。一八そは我等もし毀ちしころの
 此等のものを復た建てなば、己自ら背く者なることを我はせばなり。一九そはわれ掟によりて
 掟のために死ねり、是れ神のために生くるためなればなり。二〇我はキリストと同に十字架に
 つけられたり。されど我は生く、尙ほ我にあらざらず、キリスト我にありて生き給ふなり。されど
 われ今例にありて生くるは、我を愛し給ひ、且つ我がために己自らを付し給ひし神の子の信仰

に在りて生くるなり。二 我は神の魂を傍奪せず、そは義もし掟によりて「あり」とせば、キ
 リストの死に給ひしは無用なればなり。三
 第三節
 三、お慰なるガリヤ人よ、その目前に十字架につけられ給ひたるイエスキ
 リストの、明かに描かれたるに、眞理に願はざるやう、誰が汝等を誑かせし
 や。二我は唯この事を汝等より學ばんことを欲す、汝等は掟の行にて義を受けしや、或ひは信
 仰を聞きてなるか。三その如く汝等は思はざるや。冀にて始まり今肉にて死なせらるるか。四汝
 等はかくまで多くの苦を徒に受けしや、まさか徒に徒にてもあるまじ。五されば彼の汝等に靈を
 賜ひ、また汝等のうちに力ある行を行ひ給ふは、掟の行にてか、或ひは信仰を聞きてなるや。
 キリストは神に任せまつれり、されば彼に義と稱し、掟に拘へられたり、とあるが如し。七されば
 信仰の人々、此等の者はキリストの子なることを知れ。八また罪業は、神が國人を信仰にて
 義とし給ふことを豫め見たれば、キリストは、すべての國人は、汝に於て祝福せらるべし、
 と豫め福音を宣傳したり。九故に信仰の人々は、信仰あるキリストと同に祝福せらるるなり。
 一〇そは掟の行につきてある者は、罪の下にあればなり、そは掟の巻に録するすべての者の
 うちに在りて、これを録する者はみな、誑はれたる者なり、と録されたればなり。二 され
 ば掟にて神の前に義とせらるる者なきことは明かなり、そは義しき者は信仰にて生くべければ
 なり。三 されど我は信仰にてあらざらず、反つてこれを爲す人はそのうちに生くべきなり。四

キリストは我等のために血となり給ひて、掟の祖より我等を贖ひ給へり、^一それはすて末に照かる者は血はれたる者なり、と歎きけるればなり。^一是れ我等が信仰によりて、^二天の約束を愛せりたるに、^三アブラハムの祝禮のキリストイエスに在りて國人にまで及ばんためなり。^四兄弟等よ、人に循ひてわれ云はん、人の結べる契約だに、誰もこれを傍容せ、或ひは加ふる者なし。^五されどかの約束は、^六アブラハムと彼の種とに對して割ひ給ひしなり、即ち彼は多くの者につきての如く、^七種種と云ひ給はず、されど一アハムにつきての如く、即ち汝の種に、と云ひ給へり、^八是れキリストなり。^九モさればわれかく云はん、かの四百有三十年の後に於ては、キリストのために神より豫め結ひ給ひし契約を踐て、^{一〇}約束を無効ならしめしことなし。^{一一}是れは世嗣もし掟にてならば、もはや約束にてにはあらざればなり。されど神は約束によりてこの手を立てられたる約束を要けし者に、かの種の来るまで加へられたるなり。^{一二}されどその仲保者は一アハムのみにあらず、されど神は一におはします。^{一三}是の故に掟は神の約束に逆らふや、有るまじきことなり。そは與へられたる掟、もし活かすことを得るものなりしならば、^{一四}實に義は掟にてありしなるべし。^{一五}されど聖賢はすてのものを罪の下に鎖ぢ込めたり、^{一六}是れ約束はイエスキリストの信仰にて、^{一七}信する人々に與へ給はんためなり。^{一八}されば信仰を來らし以前は、^{一九}將に啓示せられんとする信仰に至るまで、鎖ぢ込められつつ我等は護られた

り。^{二〇}故に掟はキリストに誣るまで、我等の傳となれり、^{二一}是れ信仰にて我等の義とせらるるためなりしなり。^{二二}されど信仰來りたれば、もはや我等は傳の下にあらず。^{二三}それはすてて汝等はキリストイエスに在る信仰によりて神の子なればなり、^{二四}モそれはすてキリストに入れテアブラハムせられたる汝等は、^{二五}みなキリストを濟たる者なればなり。^{二六}そこにエズラ人なくギリシヤ人もなし、^{二七}そこに奴僕なく自由人もなし、^{二八}そこに男子も女子もなし、^{二九}それはすて汝等はキリストイエスに在りて一なればなり。^{三〇}されば汝等もしキリストのものならば、^{三一}そのとき汝等はアブラハムの種にして、^{三二}約束に循ひて世嗣なり。

第四章

われ云はん世嗣はすての物の主なれども、^一小兒の時の間は、^二奴僕と少しも區別あらず、^三されど彼は父の豫め定めたる「期」まで、^四後見人また家宰の下にあり。^五かくの如く我等も小兒なりしときは世の小學の下に奴僕にてありしなり。^六されど時の満の到りしとき、^七神はその子を使はし給へり、^八婦より生まれ、^九掟の下に生まれ給ふ。^{一〇}是れ我等の獅子たることを得んために、^{一一}掟の下なる者を躰ひ給はんためなり。^{一二}されば汝等は子なるが故に、^{一三}神は、^{一四}アベ、^{一五}即ち父よと呼ぶ、^{一六}その子の靈を汝等の心のうちに使はし給へり。^{一七}かくの如くもはや汝等は奴僕にあらず、^{一八}子なり。^{一九}さればもし子ならば、^{二〇}キリストによりて神の世嗣なり。^{二一}然るに當て神を知らざりしとき、^{二二}汝等は本來神々にもあざざる者に對して奴僕にてありき。^{二三}されど今は神を知りたれば、^{二四}然らず、^{二五}聖なる神より知られたれば、^{二六}如何にして汝

等は復たかの弱き、且つ貧しき小學に歸りて、更めてこれに奴僕たらんと欲するが。一〇 汝等は、日と月と期と年とを離る。二 われ汝等を懼る、或ひは我は汝等のために徒に勞したるべ

ことを。二 兄弟よ、願くは汝等我が如くなれ、そは我は汝等の如くなりたればなり。汝等は少しも我を害はざりき。三 されどわれ最初は肉の弱によりて、汝等に福音を宣傳しことを汝等は

知る。一 且つ汝等は我が肉にある我が試を賤しめずまた厭はず、反つて神の使の如く、キリストイエスの如くに我を受けたり。二 五 そのとき汝等の福は如何にありしや。そはわれ汝等に

離す、即ち汝等ほもし能ふべくんば、汝等の目を振りてこれを我に與へんと思ひたればなり。一 六 われ汝等に眞を語りしが故に、汝等の敵となりしや。一七 彼等が汝等に熱心するは良き

「心」にあらず、唯汝等をして彼等に熱心せしめんとて、汝等を「我等より」離さんと欲するのみ。一八 良き事に恒に熱心するは良し、されば常に汝等の許に我が居合はずときのみにある

ず。一九 我が幼児よ、汝等のうちにキリストの形かたちくられ給ふまで、我は復ひ陣掃するなり。二〇 さればわれ汝等の許に現に居らんことと、我が聲を更めんことを欲したり、そはわれ汝等に

就きて憑ひたればなり。二 一 旋の下にあらんことを欲する者と、我に云へ、汝等は掩を聞かざるか。三 そはアラ

ハムニ子ありき、一は婢よりし、また一は自由の婦よりし、と録されたればなり。三 然るに

婢よりの者は肉に俯ひて生まれ、また自由の婦よりの者は約束によりて生まれたり。二 此等の事は婢なり、そは此等の者は二つの契約なればなり。一はシナイ山よりし、子を奴僕に生め

り、これハガルなり。二 五 そはハガル、シナイ山はアラビヤに在りて今のエルサルレムに當り、且つ彼はその子と共に奴僕なればなり。三 されど上なるエルサルレムは自由の婦にて、我等子

への者の母なり。二 七 そは産みしことなき不生育女と喜べ、痛せぬ者と、聲をあげ且つ叫べ、そは獨り住たる婦は兒多し、寧ろ夫ある者よりも多ければなり、と録されたればなり。二八 さ

れば兄弟よ、我等はイサクの如く約束の兒なり。二 九 然るに會て肉に俯ひて生まれし者の、靈に俯ひて「生まれし」者を追奪せし如く、今もその如くあり。三〇 されど聖書は何と云ふや、婢とその子とを逐ひ出だせ、そは婢の子は、自由の婦の子と共に世嗣たるべからざればなり。

三 されば兄弟よ、我等は婢の兒にあらず、されど自由の婦の「兒なり」

第五章

是の故にキリストは自由をもて、我等を自由ならしめ給へり。堅く立て、か

く復た奴僕こいつの轡を負ふ勿れ。三 且よ、われババコ汝等に云はん、汝等もし割離せらるれば、キリストは汝等を益することなかるべしと。三 且つわれ復た割離せられたる

人おのにおに離す、彼は埃を盡く爲すべく負へる者なることを。四 汝等捉にて獲とせられたる者は、キリストより離れ、萬より落ちたるなり。五 そは我等は靈にて、俯仰にて、義の道を

待てばなり。六 そはキリストイエスに在りては、割離も無割離も能あることなく、唯義により

て美はしき外類あらんことを欲する此等の者は、割禮せられんことを汝等に強ふ。是れ唯キリ

ストの十字架のために、彼等の迫害せらるることなからんためなるのみ。三 そは割禮せられ

たる彼等も捉を御らず、反つて汝等の割禮せられんことを欲すればなり。是れ汝等の肉に於て

彼等の誇らんためなり。一四 されど我には我等の主イエスキリストの十字架に於ての外は誇る

ことあるまじきなり。彼によりて世は我がために、また我は世のために十字架につけられたり。

二五 そはキリストイエスに在りては割禮も無刑體も能あることなく、唯漸しき創造のみ「能」

あればなり。六 されば此の眞に「循ひて」歩む者、彼等の上に平和と啓と「あれ」また神の

イエスエルの上にも「あれ」

一七 此の後誰も我に勞苦を掛くる勿れ、そは我は主イエスの烙印を我が體に担へばなり。八

足跡よ、我等の主イエスキリストの遺、汝等の靈と共にあれ。アメン。

ロとトリガラテヤ人に書き贈れり。

ガラテヤ人に贈れる使徒パウロの書狀 終り

エペソ人に贈れる使徒パウロの書狀

第一章

パウロ、神の意によりてイエスキリストの使徒「音狀」を「エペソ」に在る衆徒

等即ちキリストイエスに在りて信なる者に贈る。二 我等の父なる神及び主

イエスキリストより恵と平和と汝等に「あれ」

三 神即ち我等の主イエスキリストの父は祝せられます者、彼はキリストに在りて天なる者の

うちにて、靈なるものなるの觀照をもて我等を配し給へり。四 即ち彼はその意の故に循ひて、

己のためにイエスキリストによりて、我等を獅子たらしめんと豫め定め給ひたれば、五 我等を

彼の前に聖くまた取なき者たらしめんとて世の創の以前に、彼「キリスト」のうちに愛をもて

選み給へり。六 是れ愛せられ給ふ者に在りて我等を愛み給ふ、その選の榮光を隠めしめ給はん

ととなり。七 我等は彼にありてその靈の富に循ひ、その血によりて即ち曲事の赦を得となり。

八 彼「神」はその悦に循ひ、その意の眞義を我等に知らしめ給ひて、九 我等をもろろの智と

慧とに憐らしめ給ひたり。是れ彼のうちに豫め定め給ひしところなり。一〇 即ち彼はすべて

の物「即ち」天に在るものまた地に在るものを、キリストのうちに纏へ給はんとて、期の滿を

隠し給はんとせられたり。二 我等は彼に在りて、その靈の思のままにすべての事を行ひ給ふ者

の目に宿ひ、深め定められたる嗣業をも彼のうちに待たり。二是れキリストの爲に賜はれ給ひ、

かし者なる我等を、彼の榮光の讚美たらしめ給はんと欲せられたり。三我等も彼に在りて眞理の事、

「即ち汝等の救の福音を聞きて彼を信じたれば、約束の聖なる靈をもて印せられたり。一

彼は我等の嗣業の保証にて、買ひ取られたる者の贖のため、彼の榮光の讚美のためなり。

三此のゆへに我等も汝等のうちの主イエスに在る信仰と、すべての聖徒等に對する愛とを

聞きて、一絶えず汝等のために感謝し、我が歸のうちに汝等を憶ふ、一即ち我等の主イエス

キリストの神、榮光の父は汝等に、彼の知識のうちに智慧と黙示との靈を與へ給ひて、一汝等

の心の目を昭かにし、彼の召のうちに含める一望の如何と、聖徒等のうちに「在る」彼の嗣

業の榮光の富の如何と、一死彼の能の勢の働に備ひて信する我等に對して、その力の如何に優

れて大なるかどを、汝等の知るに至らしめ給はんと欲せられたり。二是れキリストのうちに在

る世にて、稱へらるすべての名の上に「擧げ」、三またすべてのものをその足の下に敷はし

め、且つ彼を集會のうちにすべてのものの上に、頂たらしめ給ひしところのものなり。三

集會は彼の體にして、すべてのものをもて、すべてのものに満たし給ふ者の潮を給ふ陸なり。

第二章 また汝等は曲事のため、また罪のため死にたる者にて、二會てそのうちに在

此の世の常に備ひて、かの不順の子等のうちに令働くところの、靈の「長なる」衆中の權の

長に備ひて歩みたり。三我等もみな會て彼等のうちにありて、肉の祭をもて振舞ひ、肉と思と

の欲する罪を爲しつ、餘の人々の如く生まねがらにして怒の子なりき。四然るに神は憐に

富み給ひて、我等を愛し給ふその大なる愛のゆへに、一罪事の爲めに死にたりし我等をも、キ

リストと共に活かし、一汝等は罪にて救はれたる者なり、一且つ共に起し給へり、かくてキ

リストイエスに在りて天なる者うちにて共に坐せしめ給ひたり。七是れ彼の慈愛をもて、キリ

ストイエスに在る我等に對して「施し給ふ」その道の便れて豐なることを、將に來らんとする

世に表はし給はんと欲せられたり。八是れ汝等は強にて、信仰によりて救はれたる者なればな

り。さればこれ汝等自らのものにあらず、神の賜物なり。九行にてにあらず、是れ勝る者な

らんためなり。一〇是れ我等は造られたる者にて、善き行のためキリストイエスのうちに創

造せられたればなり、此は神がそのうちに我等の歩むべきために豫め備へ給ひしところなり。

二一 一かゝるが故に會て肉に於て國人なりし汝等は、手をもて肉に施せる刑罰「あり」と云はる

る者より、無刑罰と云はれし者なることを憶ひ出でよ、二即ちかの期に汝等はキリストなく、

イスラエルの民籍に備なき者、またかの約束の契約の他國人にて、世にありて寂なく、また神

なき者なりき。三然るに今キリストイエスにありて、會て遠かりし汝等は、キリストの血に

て近くなりたり。四是れ彼は我等の平和におはして、双方を「一と」なし、かくて兩の罪を癒き

給ひ、^二その内にて敵、もろもろの命にて成れる敵の捉を無用ならしめ給ひた^三我々の、是れ彼は平和をなして、^二つの者を己らに於て一の新しき人に創造し給はんためなり。^一我々が「十字架」をもて敵を殺し、その十字架によりてかの双方を一體に於て神と知がしめ給はんためなりしなり。^一七かくて來りて、彼は汝等遠き者にも、福音^二平和を宣傳^一給へり。^二アそは彼によりて我等双方の者は、一の靈にて父の許に近づぐことを得ればなり。^三元されば汝等もはや他國人また異國人にあらず、聖徒等と同じ市民また神の家族なり。^四使徒等と異業者等との壁の上に建てられ、イエスキリスト自ら脚の首石となり給ふ。^五三彼のうちに建物かた組み立てられ、主に在りて増々進み、聖所となるに至らん。^六三汝等も壁をもて神の住居とならんために、彼にありて共に建てられたるなり。

第三章

是の故にわれパウロ、汝等國人のためにキリストイエスの囚人、^二汝等のために我に與へられたる患の處置を汝等ば聞きしならん、^三即ち彼は黙示に備

ひて典義を我に知らしめ給へり、われ前に少し録したるが如し、^四汝等これを讀みて、キリストの典義に於ける我が識を認むることを得べし。^五此は今鑑をもてその聖き使徒等と異業者等との啓示し給ひし如くに、他の時代に於ては人の子等に知らしめ給はざりき。^六即ち國人は福音によりて、キリストに在りて共に世綱となり、また共に一體となり、また彼の約束を共に享くる者となることなり。^七我は彼の力の働に預ひて、我に與へ給ひし神の患の賜物によりて

れが事人となれり。^八すべての聖徒等のうちの故小き者よりも小き者なる我に、此の恐即ち國人のうちに、福音^二キリストの測るべからざる富を宣傳ふること、^一かまたキリストによりてすべての物を創造し給ひし神のうちに、永より隠れたる典義の親しき交の、すべて如何なるかを昭かにすることを與へ給へり。^三是れ今集會によりて來なる者のうちに、長と權とに神の様々なる智慧を知らしめ給はんためなりしなり。^二「此は彼が我等の主なるキリストイエスのうちに、^一隠し給ひし來の旨に預へるなり。^三我等は彼にありて應せず、また彼の信何によりて、確信をもて近づぐことを得るなり。^四かかるが故にわれ汝等に来む、汝等のために^五「我^六が親にて諸屬する勿れ、^七こは汝等の榮光なり。^八是の故に我は我等の主イエスキリストの父に、^九五天のうちなる族も、地の上的なる^{一〇}「族も^{一一}「彼のものと稱へらる^{一二}」父に^{一三}「我^{一四}が親にて諸屬する勿れ、^{一五}こは汝等の榮光なり。^{一六}是れ彼がその榮光の宮に預ひて、力をもてその靈によりて、汝等に向ひて我が膝を屈む、^{一七}是れ彼がその榮光の宮に預ひて、力をもてその靈によりて、汝等をして内なる人を強うせしめ、^{一八}キリストを信仰によりて汝等の心に住ましめ、^{一九}「我^{二〇}のうちにに扱ぎし、且つ堅くこれに立ちて、^{二一}すべての聖徒等と共に、^{二二}その廣きまた深き、また深き、また高きの如何を悟ることを得しめ、^{二三}かくて知識の超越なるキリストの愛を知り、^{二四}神の圓滿を汝等のすべてに滿たしめ給はんためなり。^{二五}されば我等のうちに働き給ふ力に預ひて、我等が求むるところ或ひは思ふところより、^{二六}甚く憐れたるすべての事を爲すことを働給ふ者に、^{二七}三彼に、^{二八}世々の世々に至るまで、^{二九}限なくキリストイエスにある集會のうちに榮光^{三〇}「あれ」。

第四章

是の故に主に在りて囚人なるわれ汝等に勸む、汝等の召されし召に値して歩

まんことを。二あらゆる謙遜と柔和とをもち、互に愛をもて堪へ、三平

和の絆をもて愛の一致を譲らんことを勉めよ。四一體また一靈、汝等の召されし召の望の一た

るが如し。五主は一信仰は一、*すての者の神即ち父は一、彼はすての

もの上に「おはし」またすてのものに賛き給ひ、また汝等すての者のうちに「おはしま

す」まされど思はキリストの賜物の益に荷ひて、我等の一人一人に興へ給へり。A かるが故に

彼は云ひ給ふ、彼は高きに昇り給ひしとき、憐を擲にし、賜物を人に興へ給ひたり、カされば

彼の昇り給へりとは、彼先づ地の最低き處にまで、降り給ひしにあらすして何ぞや。一〇 かの

降り給ひし彼は、すてのものに満たんだめに、天のすてのものの上に昇り給ひし者なる彼

なり。二 かくて彼は或る者には使徒を、また或る者には福音者を、また或る者には福音宣

者を、また或る者には牧師を、また或る者には教師を興へ給へり。三 「これ」使徒をさうし、

奉事を行ひ、キリストの體の徳を建てんため、三 尙ほ我等すての者をして、神の子の信仰と

知識とを一致せしめ、完き人即ち圓滿なるキリストの身分の益にまで進せしめんため、四 是

れ我等ももはや人の罪と、惡を任組める巧ともてる、敬の風ごとに掩られ、且つ幾ひ廻はさ

る小兒たらず、五 されど眞理を愛のうちに保ちて、すての事、彼即ち頭なるキリストに

至るまで育てたためなり。六 彼に本づきて全體は組み立てられ、またあらゆる筋々の交はりて結合し、部分々々の益に應じたる働によりて體は成長し、己自ら愛のうちに徳を建つるに至らしむ。

一 是の故にわれかく云ひ、且つ主に在りて證せん、汝等ももはやその思の應なるに任せて歩む國人の如くに、歩む勿れ。二 汝等はそのうちにあるところの無知のゆへに、その心の頭なるのゆへに、思を暗まし、神の生に遠ざかれり。三 汝等は恥を知らず、貪をもてあらゆる不淨を行はんだために、己自らを好色に付せり。四 されど汝等はその如くキリストを學べるにあらず。五 汝等はイエスに在る眞理に荷ひて彼を聞き、且つ彼にありて教へられたるならん。六 汝等は前の振舞に荷ふ齊き人、即ち惡の惑に荷ひて朽つるものを脱ぎ、七 かくて汝等の心の靈を新にせられ、八 且つ神に荷ひて眞理の義と聖ともて創造せられたる、新しき人を着るべし。九 かるが故に徳を脱ぎて、おのおのその隣人と共に眞理を説かれ。十 汝等は互の肢なればなり。十一 怒れ、されど罪を犯す勿れ、隠をして汝等の怒を越えて入りしむる勿れ。十二 惡隣に場所を與ふる勿れ。十三 盜する者はもはや盜む勿れ、戻つて必用ある者に類をお與へんために、手づから盜き事を行ひて勞すべし。十四 はずて騙れたる言は、汝等の口より出で往かしめず、されどもし善きもの「おらは」徳を建てんために必要に應じて「云へ」是れ聞く者に徳を興へんためなり。十五 また神の親なる靈を哀しましむる勿れ、汝等は眼の目だ

に爲し給ふ如くせよ。三 是は我等は彼の骸の骸なればなり、彼の例よりし、またその骨よりす。三 是の故に人は父と母とを捨て、その妻に附くべし、即ち二者一の身たるべし。三 此の眞義は大なり。されど我はキリストのために、またその集會のために云ふなり。三 されど汝等は一人一人己自らの如く、その如くおのおの己が妻を愛すべし、即ち妻も夫を愛するためなり。

第六章

二 汝の父と母とを敬へ、これ約束をもてる骸の第一なり、三 是れ汝に福とならんため、また地の上にて汝の畏懼とならんためなり。四 父なる者よ、汝等の目を怒らしむる勿れ、されどこれを養ひ育てるに、主の靈と諭とをもてせよ。

五 奴僕なる者よ、キリストに對するが如く、懼と懐とをもて、また汝等の心の誠實をもて、肉によれる主に順へ。六 人を撃はず者の如く、目の前の事を務むることなく、キリストの奴僕

の如く奴より神の意を爲し、七 人に對するにあらず、主に對するが如く、畏き心をもて謙ぶべし。八 是は奴僕にもあれ、自由人にもあれ、おのづかの善を行はば、主より報を授けんことを知ればなり。九 また主なる者よ、彼等に對して同じき事を爲し嚇すことを止めよ、是は汝等も己が主の天におはして、その前には偏頗あらざることを知ればなり。

一〇 その餘、我が兄弟よ、主にありてまたその能の勢をもて力づけられよ。二 惡魔の仕組

に逆らひて立つことを得んために、神の武器を磨るべし。三 是は我等は血と肉に逆らひて格闘するにあざればなり、されど長に逆らひ、權に逆らひ、此の世の時を宰する者に逆らひ、天に勝る者のうちに在る惡の業なる者に逆らふなり。三 此のゆゑに神の武器を執るべし、是れ惡しき目に於て、敵に逆らひ、且つすべての罪を行ひ果て、立つことを得んためなり。四 是の故に眞理をもて汝等の腰に佩ひ、また義の胸當を着けて立て。五 また平和の福音の傳をもて鞭として、是に結び、六 此等のすべての上に信仰の柄を執るべし、これをもちて惡しき者の燃ゆる技倆を盡く燒すことを待てし。七 又 また救の胃及び靈の劍、即ち神の詞を受け、八 あらゆる詩と祈願とによりて、すべての期に靈をもて祈り、また目を醒ましむりて、すべての聖徒等のために、あらゆる堅き忍と祈願とをもて此の事を爲し、九 且つ福音の眞義を知らしめんために、憚らず我が口を開くとき、言を我に與へ給ふや我がために「祈るべし」。三〇 此がために我は鐘に繋かれたる使節なり、即ちこれをもちて我をして必ず語らざるべからざらしむる如く、我の大膽ならんためなり。

三 されど我は何を感じつつあるか、我に就きての事を汝等も知らんため、驚せらる兄弟にして、主に在りて惜なる事人なるチキコは、すべての事を汝等に知らしむべし。三 われ此の事のために我を汝等の許に遣はせり、即ち汝等は我等に就きての事を知らんため、また汝等は汝等の心を慰めんためなり。三 父なる神及び主イエスキリストより、信仰とともに平和と

愛と兄弟等のうちにあれ。三我等の主イエスキリストを變じて愛するすべての者のうちに
 造られ。アメン。
 テキコに托してロマよりエペソ人に書き贈れり。

エペソ人に贈れる使徒のパウロ書状 終り

ピリピ人に贈れる使徒パウロの書状

第一章

パウロ及びチモテ、イエスキリストの奴僕等、書状をピリピにてキリスト
 イエスに在る、すべての聖徒等並に見ゆ人等と事へ人等とに贈る。二我等
 の父なる神及び主イエスキリストより恩と平和と汝等に「あれ」

三われ汝等を喜び出づるたびに、且恒に汝等すべての者のために、祈願することに、喜びて
 祈願しつつ、且汝等が物の日より今に至るまで、福音にまで汝等の親しき交のため、我が神
 に感謝しまつる。四これ汝等のうちに益き初を始めし者の、イエスキリストの目までに完うす
 べしと確く此の事を信すればなり。七即ち汝等は我が罪にも、また福音を辨明し、且つこれ
 を啓くるときにも、我を心に俵ちて、我が恵に同じ興る者なるが故に、汝等すべての者のた
 めにかく念ふは、我にとりて義しきことなり。八そはイエスキリストの情をもて、汝等すべて
 の者を慈ひ慈ふことにつきて、神は我が罪人におはせばなり。九されば我はかく祈る、即ち
 汝等の愛の、加護と情とのうちに情ほ増々溢れて、一〇憐れたる事を経験し、キリストの目のた
 めに、信望なる者また麗なき者たるべく、一イエスキリストによれる義の實を滿たせしめ
 神の榮光となるに至らんことを。

二 されど兄弟よ、我は汝等が我に俵はれる事の、寧ろ福音の進歩を來せしことを知らんことを願ふ。三 即ち我が繯は、總中及びその餘のすべての者に、キリストにありて顯になれり、一四 且つ兄弟等のうちの多くの者は、我が繯のために強く主を信じて、懼ることなく懼るるばかり勇みて言を語たれり。一五 如何にも或る者は嫉と諍とによりて、また或る者は恨によりて、キリストを罵るなり。一六 彼等は酸意にあらず、黨心より我が繯に疑を加へんことを想ひて、キリストを宣傳するなり。一七 されど彼等は福音の精明のために、我の立てられたることを知りて、愛よりこれを宣傳す。一八 されば如何に、或ひは証、或ひは眞理、すべての場合にキリストは宣傳せられ給ふなり、乃ち我はこれをもて哀ぶ、尙ほ驚ぶべし。一九 是は此の事の、汝等の祈願とイエスキリストの益の支とによりて、我がために救に至るべきことを知ればなり。二〇 是れ我は何事にも耻づることなく、反つてあらゆる大膽をもて常の如く、今も我が體をもて、或ひは生によりても、或ひは死によりても、キリストの益められ給はんことを、我が切に期しました潔むに逾へり。

三 是は我にとりて生くることはキリストにて、死ぬることを得なればなり。三 されど肉に於て生くること、此の事も我がために働の實(あらは)し、我は救を運ぶべきことを知らず。三 我は此の二つにて振まるなり、我が願ふところは(世を)去ること、即ちキリストと同に在らんことなり、それは最も勝れはなり。三 されど(我の)肉に留まるは、汝等のゆへに更に

に必要なり。三五 されば確く此の事を信するが故に、我は汝等の信仰の進歩と喜とのために、汝等すべての者と留まり、且存ぶべきことを知る。三六 此れ汝等の許に復ひ我の到來によりて、汝等の許の我のゆへに、キリストイエスにありて増さんためなり。三七 汝等唯キリストの福音に祈する市民たれ。是れ或ひは我が來りても汝等を具、或ひは離れ居りても汝等に就きての事、即ち汝等が銀を以て堅く立ち、魂を以てして福音の信仰のために、共に働むことを聞かんためなり。三八 また進らふ人々より何事にも驚かざる勿れ、此は彼等には誠の表、されど汝等には敬の(表)なり、これ神より來るなり。三九 是は汝等に、キリストのために齊に彼を信することのみならず、尙ほ彼のために苦を要することを賜はりたるが故に、四〇 汝等は我に於て且しとらにして、今我に於て聞くとらと同一願を有つなり。

第二章

是の故にもしキリストに在る多少の愛、もし愛の多少の類、もし愛の多少の親しき交、もし多少の憫と慈恵と(あらは)し、我が善を滿たしめ、即ち念を同じらし、愛を同じらし、魂を同じらし、念ぶことを一にせよ。四一 何事も黨心または嫉意に陥らぬ、反つて念を卑うして、己自らより他の獲むるを思へ。四二 汝等のおの己自らの事を憂ひず、反つておのおの他の事をも(憂)みよ。四三 (汝等)キリストイエスのうちに在(ありし)ことをの、此の事を汝等のうちに念ぶべし、汝等は神の愛におはしければ、神と均しくおはすことを奉ひ取と思ひ給はず、されど人の像にて顯はれ給ひ、奴僕(の姿)を取りて己自らを處しうし給

へり。Aまた人としての状にて見出だされ給ひて、死、十字架の死にさへ至るまで、自らを以て、己自らを卑し給ひたり。九、かかるが故に神も彼を高め給ひ、且つもるもの名に優れたり、己自らを賜ひたり。一〇、是れイエスの名に於て天なる者、また地なる者、また地の下なる者の、すべての隙を履ましめ、二、且つもるもの音をして、父なる神の祭光のために、イエス Kristus は主なり、と告白せしめ給はんとためなり。三、是れは我が愛せらるる者よ、汝等の恒に願ひしが如く、獨り我が到来のときのみなならず、尙ほ今我が居らざるときは、爾等(爾等)の憐れと憐れをもて汝等の救を乞はせ給はせよ。三、是は忠すことをも、また行ふことをも、(その)故のために汝等のうちに行ひ給ふ者は神におはせばなり。四、すべての事、成し給ふこと、また勘考すること無くして爲せ。五、是れ曲れる邪なる時代のうちに在りて、汝等の實むべきところなき者、また難なき者(即ち)取なき神の兒とならんためなり。汝等は彼等のうちに生(なま)す言を擲つ、つ、光の如く世に輝け。六、是れキリストの目に、我の空しく走りしことなく、また虚しく勞せざりしことを、我がために辨らんためなり。

一、是れど我も汝等の信仰の獻げ物と奉仕との上に「我が血を」流せども、我は憐れん汝等すべてと共に喜ばん。二、是れば汝等もこれを喜べ、即ち我と共に喜べ。三、是れど我も汝等に就きての事を知りて慰められんために、遂に予も手を汝等に遺はんとことを主イエスに在りて祝む。四、是れは同じ魂をもて汝等に就きての事を、眞實に心遣ひ

する者を、人も有せざればなり、二、是れ彼等はみな己自らの事を聚めて、キリストイエスの事を「祭め」さればなり。三、是れど汝等は彼の細腰を知り、即ち彼は兒の父に對するが如く、我と共に福音のために離(はな)れたり。三、是の故に我に就きての事の「如何」を見るや否や、直に此の事を遺はざんことを望む。四、また我自らも遂に來んことを主にありて確く信す。五、是れど我は我が兄弟、また同勞者、また職友なる、されど汝等の使にして、我が乏しきことの任(にん)う人なるエバソロトを、汝等の許に遣はさざるを得ずと思へり。六、是れは汝等すべてを戀ひ慕ひつゝありしが、己が病みしことを汝等の聞きしが如く、に頂垂れ居ればなり。七、是れは彼は死なんとするばかり病みたまればなり。されど神は彼を救ひ給へり、齊に彼をのみならず、尙ほ哀に哀を重ねざしめんとして、我をも「救ひ給ひたり」。八、是の故に汝等の再び彼を見て喜び、我も哀をかうせんために、愈々勉めて彼を遣はさん。九、是の故に汝等はありゆる事をもて、主にありて彼を受けよ、且つ此の如き人々を敬べ。一〇、是はキリストの行のゆへに、彼はは魂を遺らず、汝等の我に對して作るこの思ひざるを遺たさんとて、死にまで近づきたればなり。

第三章

その餘、我が兄弟よ、主に在りて喜べ。此等の事を汝等に傳き贈るは、我にとりて厭はしからず、汝等には安んじたり。二、火を耐え、惡しき働き人を脚

且つ肉に頼まざる者は制慾あればなり。且たとひ我は肉に於ても頼を有つと雖ども、これを頼ます、されど、他の人もし肉に於て頼むべきところありしと思はば我は勝れり。至即ち凡ゆるめ制慾、イスラエルの子孫の、ヘンミンの族の、ヘン人のうちのヘン人、捉に捕へばパリサイの人、熱心に捕へば集會を苦害し、捉にあるところの義に捕へば缺なき者になれり。されど、嘗て我がために得たりしもの、此等のものを、キリストのゆへに損と思へり。人加之が主なるキリストイエスを知るは、獲れたる事なるゆへに、我はすべての物を損なりと思ひつ、彼のゆへに、すべての物を損せしかば、腐敗なりと思ふ。是れキリストを得、且つ捉に本づきての我が義にあらす、されどキリストの信仰によりての義、即ち信仰にありて神に本づきての義をもちつ、彼のうちに具出され、彼を知り、即ちその死と同じ態にたりて、その難の力、またその苦の難しき交を、知り、如何にもして、死人の態にまで達せんためなり。三「されど」われ既に「これを」受けたり、「と云ひ」、或ひは既に差ちせられたりと「云ふ」にはあらす、されど捉ふることを得んか、我は進み求めつあり、これがために我はキリストより捉へられたるなり。三兄弟よ、我は未だ自ら「これを」捉へ得たりと拵へず、されど一事、即ち後ろに在る物を忘れ、前に在る物に向ひて身を懸し、一四我はキリストイエスに於て神の「賜ふ」高き召の獲義のために、自當に捕ひて進み求む。五是の故に完者はみななく思ふべし。また汝等もし異なる事を念はば、これをも神は汝等に降示し

給ふべし。一六 されど我等は判りしところにて、同じ典をもて歩むべし。

一七 兄弟よ、我に同じに候ふ者となれ、且つ汝等が我等を例となしたるままに、その如く歩む人々を勉めよ。一八 是れ我が「義に」屢々汝等に云ひ、今も泄きながら云ふところの、歩みつある多くの者、彼等はキリストの十字架の敵なればなり。一九 彼等の終は滅なり、彼等の神はその腹なり、且つその耻をもて榮光とす、彼等は地の事を思ふ。二〇 是れ我等の民猶は天に在り、我等はその處より「來り給ふ」聖主、主イエスキリストを待ちつづければなり。二三 彼はすべての物を己に從はしむるその力の働に備ひて、我等の卑しき體を變へて、その榮光の體に變らしめ給はん。

第四章

されば愛せらるる者、また慕はるる者なる我が兄弟、我が尊、また冠よ、しかく主において堅く立て、獲せらるる者よ。二われエリマテヤを勉む、またわれキリストを勉む、主に在りて念を同じうせんことを。三 また眞實なる働の個よ、われ汝にも諸君、かの婦等を扶けよ、彼等はクレンメント及びその他の我が同勞者と共に、福音のために我と共に働きたり。此の人々の名は生の爲物にあり。

四 恒に主において愛へ、われ復た謝はん、遂之。五 汝等の寛容をすべての人に知らしめよ、主は近し、何事をも心遣ひする勿れ、されど事ごとに謙と願とをもて、感謝とともに汝等の求むる事を神に知らしめよ。七 さればすべての思に優る神の平和は、汝等の心と汝等の所

存とを、キリストイエスにありて御らん。

ハその儼、兄弟ト、すべて異なること、すべて償ふべきこと、すべて義しきこと、すべて深きこと、すべて親しむべきこと、すべて宜しき暇あること、すべて宜しき徳、如何なる徳、如何なる徳にても、此等の罪を赦ふべし。キリストに學び、また受け、また聞き、また見しところのもの、此等の罪を行へ、されば平和の神は汝等のうちにおはさん。

一〇 されど我は汝等の、現に我がために念ふことを憚らしめしことを、幸にありて大に喜べり。汝等はこれがために念ひつゝありしかど、期を得ざりしなり。一 我は足らざることのみへに云ふにあらす、我は是のうちに我ありて、安んずることを學びたればなり。二 我は単しからざるべき「逆」を知り、また憂なるべき「逆」をも知る。懼ぐことも、懼らざることも、無なることも、足らざることも、事ごとにもまたすべての事に懸連せり。三 我は我を力づけ給ふキリストにありて、すべての事を「爲し」能ふなり。二 されど汝等の我が難に間に與りしは良しニヒビ人ト。汝等も福音の初に於て、我がツケ下ニナより出で來りしとき、與ふることもまた受くることのために、我と親しく交はりしは、獨り汝等を降きては、孰れの福音にもなかりしことを知る。ニ 是はツカロニクに「在りしとき」汝等は一たびも二たびも、我の足しきために逆はしたればなり。一 我われ贈物を棄めんとするにあらず、されど汝等の所のため、その實の弊からんことを察むるなり。八 されど我はすべての物を有らて餘あり、我は

ビリビ人に贈れる使徒パウロの書状 終り

神に受けられ、流せらるる眠げ物なる、汝等よりの勞しき香ある物を、エバフロネトより受けられたは満たされたり。ニ されば神はその富に循ひて、キリストにありて、榮光をもて汝等のすべての足しきを滿たし給ふべし。三 されば我等の公なる神に、世々の世々に至るまで榮光【おれ。アメン】

ニ キリストイエスにある聖徒等おのづかに挨拶せよ。我に伴ふ兄弟等、汝等に挨拶す。三 すべての聖徒等、殊にカイサルの家の者、汝等に挨拶す。三 我等の主イエスキリストの恵、汝等すべて者のうちに【おれ。アメン】

エバフロネトに托して、ロムよりビリビ人に書き贈れり。